

寺田勇吉主宰による精華学校の転地修養会に関する研究

青木清隆

Abstract

Terada Yukichi (1853–1921) was a bureaucrat in the Ministry of Education and an educator during the modern state construction period (Meiji era to Taisyo era), and contributed to modernization of education in Japan. In 1905, he established Seikagakko (–1945) due to embodiment of his education philosophy, and assumed the principal of its school (1905–1921). Seikagakko adopted an integrated education from a kindergarten to the girls' high school at the same place, as unique in those days. In addition, this school emphasized physical education and made an effort on an extracurricular activities related physical education, in spite of the time when there was strong tendency of overemphasis on intellectual education. Its example is Tenchishuyo-kai. In Europe and America after the middle term in the 19th century, a school developed a program using a natural environment during a vacation with staying some overnight, aiming at children's health promotion, e.g. Waldshule, Ferienkolonie, Open Air School etc. Tenchishuyo-kai was modeled on Ferienkolonie in Germany. This meeting was the first forest school in Japan, that was put into effect 3 times to a schoolchild for 3 years from 1907. Its program produced the effect of the improvement in constitution, physique and physical strength for a participant. This effect was paid much attention in Japanese society, because it was reported to newspapers and magazines. Tenchishuyo-kai at Seikagakko played the important role in the promotion of forest school in Japan during Taisyo era.

1. はじめに

近代日本におけるスポーツが、学校を中心に普及や発展を遂げてきたことは多言を要さないところである。また、明治期から大正期の日本の学校において、たくさんの体育・スポーツ行事が企画・実施されていたこともよく知られているところであろう。この時期の小学校や中学校で一般的に行われていた学校体育・スポーツ行事とは、運動会、長距離走大会、武術大会、山登り、林間学校、臨海学校などである。本稿で取り扱う精華学校の「転地修養会」とは、これらの中の林間学校のことである。

1888（明治21）年あたりから、ドイツ・フランス・スイスを始めとする欧米諸国で、フェリエンコロニー（Ferienkolonie）やヴァルトシューレ

（Waldschule）という名称で盛んに普及をしていく林間学校が、日本へ伝えられるようになるのは明治20年代と早い時期ではあったものの、しかしながら明治期においては数名によって紹介された程度に過ぎなかった¹⁾。こうした状況にありながらも、明治40年代になると東京の小学校などで僅かながら実施され始め、それが大正期になると東京以外でも実施するところが急速に増えていき、1920（大正9）年頃には実施をしていない都道府県は皆無といえるほど全国へと普及をしていった²⁾。

1907（明治40）年から1909（明治42）年までの3回実施された東京九段の精華学校「転地修養会」は、まさに我が国における初期の林間学校である。日本の林間学校に関する研究において、この精華学校の「転地修養会」は、日本で最も早くに実施されたものであると位置づけられることが多

い^(註1)。しかしそれらのどの研究においても、転地修養会の実施概要が簡単に触れられているだけで、その内容について詳細に究明されたものは皆無である。

そこで本研究は、未開拓な状況である同校の「転地修養会」について、実施されるに至った経緯から3回の実施内容、あるいはその後展開されていく林間学校に与えた影響などについて、残存する史料から明らかにすることを目的とする。大正期の林間学校の研究が主流である現状を踏まえると、日本における林間学校研究の課題の一つは、研究が遅れているといわざるを得ない明治期の状況を詳しく明らかにすることであろう。しかも、「転地修養会」が本邦初の本格的なものであるとするならば、その内容の究明は重要な課題の一つと考えられる。

「転地修養会」は国内で前例がない状況下で、精華学校を設立して校長を務めた寺田勇吉(1853-1921)によって企画・導入されたものである。したがって、本研究では単にその内容などを明らかにするだけではなく、寺田の教育理念や教育界での活動、精華学校の教育方針・教育内容なども含めて紐解くことで、「転地修養会」への理解を深めていきたい。ただし、寺田あるいは精華学校ともに教育史研究において研究対象となったことがほとんどないため、それぞれの解明に対しては章立てをしながら行うものとする。

寺田は、明治期から大正期において、文部官僚や教育者として日本の教育の近代化に寄与した人物であるが、彼に関する先行研究は、文部官僚と日本体育会体操学校を統括する立場のものに集中しており^(註2)、しかもそのほとんどが役職や活動内容の記述にとどまっている。いわゆる研究として取り扱われたのは、青木清隆「寺田勇吉の生涯と業績」(1989)³⁾と、恩田裕が「休暇集落の成立過程」(1995 前掲書)の中で取り上げたもの以外見当たらないのが現状である。精華学校に至っては、全く研究がなされていない。

寺田や精華学校あるいは「転地修養会」に関して同校が所有していた史料は、1945年の空襲で校

舎が全焼し廃校となったために、それらもすべて焼失し残されているものがほとんど無い。そこで本研究では、それぞれの解明にあたって、寺田の著書^(註3)と「教育時論」・「体育」・「児童研究」・「教育界」・「教育公報」・「大日本教育会雑誌」・「中央公論」・「帝国教育」・「婦人界」などの雑誌、および「東京朝日新聞」などを主な基本史料とした。中でも多くの参考や引用を寺田の著書に求めたが、可能な限り先行研究の文献や雑誌および新聞などで日付・内容などに誤りが無いかの検証作業を行いながら進めた。

2. 教育界における寺田勇吉の活動の概略と功績

2-1. 文部官僚としての活動と功績

寺田勇吉は、「士の今日に處するものは、須らく泰西文明の學術を究めて、以て時勢の要求に應せざるべからず、而して泰西文明の學術を究めんと欲すれば、先づ其國語を究めざるべからず⁴⁾」との考えから、1870(明治3)年18歳の時に、大学南校助教授・相原重政(のちに内閣統計局審査官)の門下生となりドイツ語の初歩を学習した⁵⁾。そしてその翌年から、大学南校と東京開成学校において4年間獨逸学や鉱山学を修業する。

卒業後の1875(明治8)年、寺田はドイツ語能力が評価されて、当時行政を執り行っていた太政官に出仕することになった。そこでは会計部や統計院などでの業務にあたる一方、共立統計学校^(註4)などで講義も担当していた。この時期の講師の経験から教育界に身を投じたいという希望を持つようになり、それは浜尾新(当時文部省専門学務局長)の推薦によって、1883(明治16)年の文部省転属というかたちで成就することになった⁶⁾。以後、50歳まで文部官僚としての道を歩み続ける。

転属後しばらくは学務局に勤務し、国内学事巡視や文部大臣官房翻訳掛り、中学校師範学校教員免許学力試験委員などの省内業務に携わっていたが、1889(明治22)年に寺田のその後の活動を大きく左右するターニングポイントが訪れる。それ

は、久保田譲（のちに文部大臣）を始めとする欧米視察団のメンバーとして約1年に亘って渡欧する^(注5)機会を得たことである。この近代国家の先進国における視察や調査こそが、のちに日本の教育の近代化に向かって重責を担って活躍する寺田の礎になったものと考えられる。

帰国後は参事官に任命されて普通学務局兼務となり、さっそく教育法令の起草や改正業務に参画する重要な職務に就いた。これは、普通学務局長に任命された久保田が、教育法令の改正を通して日本の教育改革を推進するために、その参謀役として寺田を抜擢したものであり、これより欧米での学事調査の成果が有形化していくことになる。久保田の下での活動が評価されて、寺田はその後第2次伊藤博文政権下で井上毅が文部大臣を務めた1893（明治26）～1894（明治27）年に、井上のブレーンの一人として指名を受け、種々の教育法令の起草や改正を中核的な立場で行っていく^(注6)。

19年間におよぶ文部官僚時代の寺田は、特に明治20年代に入ってから、数々の要職を務めながら日本の教育の近代化に功績を残していく。その彼が教育界に果たした最大の功績とは、近代日本の教育制度が定型化したとされる明治20年代から30年代の重要な時期に、一つは森有礼と並んで明治期の二大文相と評され、かつ明治国家形成のグランドデザイナーとも称される井上の教育政策を中心的立場から支え実現させたことである⁷⁾。今一つは、明治30年代に大臣官房会計課長として、国家予算における教育予算編成や会計調査を責任者として携わりながら^(注7)、あるいは視学官としての立場から地方教育の巡視・監督さらには啓蒙を行いながら、初等・中等・高等教育から実業教育に至る日本の教育全般の発展に寄与したことである。

2-2. 教育者としての活動と功績

寺田は太政官や文部省での任務にあっていた時代に、教員として統計学やドイツ語の教科指導も積極的に行っている。その活動をまとめると、以下のようなになる⁸⁾。

- ① 共立統計学校（統計学），1883（明治16）年度
- ② 独逸学協会学校^(注8)（ドイツ学），1883（明治16）年度
- ③ 東京外国語学校^(注9)（ドイツ語），1884（明治17）年度
- ④ 東京大学予備門^(注10)（ドイツ語），1885（明治18）年度
- ⑤ 第一高等中学校^(注11)（ドイツ語），1886（明治19）年度，1890（明治23）年度，1893（明治26）年度，1897（明治30）年度
- ⑥ 高等師範学校^(注12)（教育統計），1900（明治33）年度

官僚として教育制度の確立や発展に取り組む一方で、教育現場の質的向上無くして日本の教育の発展は実現しないとの思いから、積極的に教壇に上がっていたと考えられる。明治政府が近代国家建設にあたってモデルとしたのはいうまでもなくドイツであり、そのドイツの状況に精通していた寺田が、将来の日本を支える子供達にドイツ学やドイツ語を直接教育・指導したことは実に意味深いことである。

寺田の教育者としての活動は、文部省を退職する前後あたりからは教科指導の教員としてではなく、学校を統括する立場での活動へと変わっていく。その活動をまとめて示すと、以下のようなになる⁹⁾。

- ① 東京商業学校^(注13)校長，1902（明治35）年度
- ② 日本橋高等女学校^(注14)校長，1907（明治40）年度
- ③ 日本体育会^(注15)常任幹事・理事，1902（明治35）年度～1911（明治44）年度
- ④ 日本体育会体操学校学監^(注16)，1904（明治37）年度～1921（大正10）年度
- ⑤ 精華学校^(注17)校長，1905（明治38）年度～1921（大正10）年度
- ⑥ 日本体育会体操学校女子部^(注18)部長，1906（明治39）年度～1921（大正10）年度
- ⑦ 日本体育会体操学校学校長代理^(注19)，1911（明

治44) 年度～1915 (大正4) 年度

上記の⑤を除く活動は、すべて就任の要請を受けたり推挙されたものである。寺田が「余は文部省に在職中、地方の學校長等に轉任の内命を受けたること數回なり」¹⁰⁾と回顧していることから、彼には校務(教育カリキュラムの管理・人的組織の管理・校舎や施設などの物的管理・運営管理)をつかさどる才覚があったと解すべきであろう。そしてそれは、自ら精華学校(幼稚園・小学校・高等女学校)を設立して、学校運営や校長職を務めあげたことから証明される。精華学校は、当時としては珍しい女子の一貫教育を実現した学校である(詳細は2章を参照のこと)。そこで、封建的女性観を脱した近代的な女性像、つまり心身ともに壮健で新しい時代に闊歩できる女性の育成に従事した。日本体育会体操学校女子部の部長を長く務めたことも併せて、寺田が当時立ち遅れていた女子教育や体育教育の普及に努める活動を展開したことは特筆すべきことである。

寺田は、明治10年代から30年代中盤にかけては教員として、明治30年代中盤から亡くなる大正期後半までは主に校長として、日本の近代教育草創期に学校教育の現場に携わり、教育の発展に寄与した人物の一人として評価しなければならないだろう。特に学校を統括する立場からの活動には、先導者としての功績が与えられるべきであり、女子教育や体育の振興に着手した点においては先駆的功績も見いだせるところである。

2-3. 体育振興者としての活動と功績

寺田は1889(明治22)～1890(明治23)年の欧米視察の際に、西洋人の体格が日本人よりもはるかに優れていることを目の当たりにし、併せて欧米諸国の学校体育の状況を視察したことなどから、日本における体育の普及・発展の必要性を強く感じるようになった¹¹⁾。ここが、彼の体育振興活動の出発点である。帰国後は体育の必要性を説く一方で、1893(明治26)年からは1891(明治24)年に設立された日本体育会の評議員を務め、

会務運営組織の一員として会員の獲得や財政基盤の強化、あるいは体育事業推進活動に参画する。

大臣官房会計課長に就任した際は、体操伝習所^(注20)の再興を目指して^(注21)「体操伝習所設立費案」を作成し、文部省内の会議に提出をしている。この計画は体操学校が少なかった当時において、体育の普及を促進させる意味で有益なものであったが、文部省ではその必要性を認めながらも、財政的な理由から見送りとせざるを得なかった。しかし、同時期に文部省内で日本体育会に対する国庫補助の建議案が浮上してきたために、寺田は転じて建議案の作成から議会での審議に至るまでの業務を先導的に取り組み、1899(明治32)年、同会への5年間の国庫補助(年額1万円)の支給が実現した^(注22)。

国庫補助の成立後、寺田は政府の監督下に置かれることとなった同会の政府監督官に任命され、3年ほどこの任務に従事する。そして1902(明治35)年にこの任を解任されると、同会の常任幹事・理事に就任し、再び役員としての立場から9年間に会務運営に携わることになる。他方で、寺田は1904(明治37)年に体操学校学監への就任を契機として、同校の教育に統括的な立場から関与することになる。1911(明治44)年からは学校長代理を務めるなど、長く同校の教育体制の拡充や教育活動の指導・監督に尽力した。学監就任以後の寺田は、体育教育の目指すべき方向性や指導者の在り方などについて数多く講演を行いながら、体育教育の質的向上に対する啓蒙活動にも力を注いでいる^(注23)。

寺田にとって体育教育を普及させるべき対象者は、男子生徒・学生にとどまらず女子生徒・学生にも及んでいる。もっといえるならば、むしろ明治30年代後半からは女子体育振興者としての活動の方が顕著であると見てとれる。日本橋高等女学校校長に着任した際には、実地の応用力を養うカリキュラムの中でも、「特に重を體育に置き體操器械を新設し、遠足を試むる等、務めて健全なる發育を」¹²⁾図ろうとするなど、体育奨励活動を展開する。また、日本体育会体操学校女子部部長職に

あつては、主として女子体育教員の養成を図りながら、女子生徒・学生への体育教育の普及を目指した。女子の一貫教育という寺田の理想を実現して設立された精華学校では、教育方針や教育活動において体育重視の特徴を全面に押し出し、正課体育以外にも転地修養会・運動会・遠足・早朝体操などの課外体育活動を実施していく。

近代日本において普及が遅れていた体育教育に対して、寺田はこのように明治20年代から継続して普及・振興活動を展開してきた。近代日本学校体育を中心的な存在から牽引してきた日本体育会ならびに同体操学校¹³⁾の要職を長く務め、教員養成や教育内容・指導法の向上を図ってきたことには評価をしなければならない。また、男子よりもさらに普及が遅れていた女子への体育振興策を展開したことに対しては、明治30年代の女子体育が新しい時代の女子教育の一環として一般化し論じられるようになり¹⁴⁾、その振興という点で先覚者の校長が第一の功労者であった¹⁵⁾とするならば、この寺田もその一翼を担った人物として解すべきである。

3. 精華学校の沿革(1905～1921年)と教育状況

3-1. 設立の経緯と趣旨

寺田は、長女長子^(注24)の公立小学校入学と東京高等師範学校附属小学校への転学を契機として、1887(明治20)年頃から中流家庭以上の子女が学ぶ私立の女子教育一貫校の重要性を認識し、その設立に対する夢を抱き始める¹⁶⁾。教育整備が整っていたとはいえない当時、「初等及高等の普通教育を聯絡して授ける學校をば、通常の公立學校以外に設け、全く小学丈にて終る子供と區別して、中等以上の児童のみを集めて教育」¹⁷⁾しなければ、教育の水準や効果が上がらないと考えたのである。貧富の差が激しかった状況下で、子供の教育に関心が高い中流以上の家庭に照準を合わせ、しかも中等教育以上は男女を分ける学び舎にすることで、彼が考える近代的な女性を目指した教育が

可能になるとの思いに達したのであろう。

そして、欧米視察の際にドイツやイギリスの一貫教育や女子教育の状況を調査したことで、その思いは具体的な計画へと変化する。以後彼は、国内外の学校制度や教育方針・教育内容などを調査しながら、50歳までに設立資金を確保することを目指し、執筆やドイツ語の翻訳^(注25)あるいは土地を購入しての賃貸収入^(注26)で貯蓄を増やすなどの準備を計画的に行った。

1903(明治36)年になると、教育者の湯本武比古^(注27)と深井弘^(注28)から「聞く貴君私立學校を設立して、貴君の理想的教育施さんと欲すと、果して然らば是れ我教育界の今日切に要求する所のものなり、冀くは吾輩兩人をして其事業に参加するを得せしめよ」¹⁸⁾との依頼を受け同意した。2人の賛同者の出現によって精華学校の設立計画は急速な進展を見せ、同年6月6日設立の議を決定、そして『設立主意書』を公にした。その内容とは以下のとおりである。

「我國文運の進歩に従ひ、中流以上の人士は、其子女に高等普通教育を授けんことを冀はざるものなきに至れり、是れ近年中學校、高等女學校等の各地に増設せられたるも、尚其の缺乏を告ぐる所以なり、亦盛なりと云う可し、元來中學校若くは高等女學校教育を受けしめんとする子女に対しては、其尋常小學校の初めより、高等普通教育を施す學校と聯絡して教育するを肝要とす、然るに我國教育の現況を觀れば、小學校は小學校單獨の目的を以て施設せられ、中學校又は高等女學校との聯絡は深く留意せられず、初等高等の普通教育を通じて個々別々に完結せしめんとするが故に、中學校若くは高等女學校に進むものは、前後聯絡なき教育を受けて、首尾一貫せる教養を受くること能はざるのみならず、修學上會て學びたることを繰返し、時間と勞力とを徒費すること尠からず、此點に留意して設置せられたるものは、我國にありては、東京高等師範學校及東京女子高等師範學校の附屬小

學校第一部の類二、三あるに過ぎず、豈遺憾と謂はざる可けんや。

されば初等教育を以て足れりとせず、尚進んで高等教育を受けんとする子女の爲に、生等は最も適切なる教育を施し、以て平素懐抱せる目的を達せんことを企圖して、精華學校を設立し、幼稚園の上に、修業年限十一箇年の學校を設け、幼稚園より小學校を経て中學校若くは高等女學校に至る迄の業を修めしめ、進んで高等教育を受けんとする者には、更に一箇年の補習學校を受くることを得せしめんとす、蓋し斯くの如く首尾連続せる編成の學校に於て、終始一貫せる方針の教育を施すときは、被教育者は心身の勞力に於ても又修業の歳月に於ても、共に浪費徒消を免れ、健全なる身體、圓滿なる品性及活潑なる精神の發達を期することを得べし、抑も国家の中堅は、高等普通教育を受けたるものによりて構成せられざるべからず、故に此教育にして其宜しきを得ば社會国家に裨補する所決して尠少にあらざるなり、生等教育に従事すること年あり、今や不敏を顧みず、敢て本校を設立し、以て如上の教育を施さんとする所以、亦實に是れが爲なり、冀くば大方の君子生等の徵衷を察し提擲扶掖を與へられんことを。

右の主意に基き、本校は左の綱領によりて教育す。

本校は教育勅語の聖旨を奉戴し、兒童の健全なる身體、圓滿なる品性、活潑なる精神の發達を期す。¹⁹⁾

しかしながら、実際に開校に漕ぎつけるまでには、「市の中央に位し、通學上便利にして、且學校衛生上適當」²⁰⁾な校地の選定や、建設費用の調達^(注29)などのために時間がかかってしまった。最終的に大隈重信・久保田讓・加納久宜(当時日本体育会会長)などにも相談をして、日本体育会の敷地の一部(借地)に建設することを決定し²¹⁾、1904(明治37)年2月7日東京府知事(千家尊福)から設立認可を受けた。そして、同年12月から校

舎の建設が始まり、1905(明治38)年3月麹町区(現千代田区)飯田町1丁目16～17番地に精華學校は設立された。

3-2. 幼稚園・小學校・高等女學校の開設と教育体制

1905(明治38)年4月、東京府庁の認可を受けて先ずは小學校(男女共学)が開校した²²⁾。生徒の獲得のために新聞や雑誌で募集を行ったものの、初年度の入学生は僅か7名(内女子児童は2名)に過ぎなかった。教職員組織は、校長1名・学監1名・担当教員1名・兼任教員4名・学校医1名・用務員1名の9名体制でスタートをしている。校長には寺田、学監には湯本、担任教員には遊佐誠甫がそれぞれ就任した。遊佐は、高等師範學校附属小學校からの転任で、初等教育に関する著書を数多く手がけた^(注30)人物である。兼任教員として採用されたのは、高等師範學校附属中學校英語科の教諭でのちに東京府立第五中學校校長を務める伊藤長七²³⁾、高等師範學校の教員でのちに東京文理科大や東洋大学教授として活躍する言語学者の神保格²⁴⁾、のちに日本体育会体操學校女子部や同会荏原中學校の教員を兼任する体育教員の井上八郎²⁵⁾などであり、寺田自身も地理科の授業を担当した。優秀な教員達を集めて、質の高い教育を実践しようとする寺田の思いが反映された教員組織であったといえよう。

寺田は精華學校設立当初から亡くなるまで、教員の選任に対しては一貫して「學校教育の善良なる成績を擧ぐると否とは、一に繁りて教員其人を得ると否とに在り」²⁶⁾との持論から、時間をかけて慎重に臨み、結果として高等師範學校や女子高等師範學校の卒業生を多く採用した。そのことの原因について、彼は次のように説明している。

「本校の教師は主として高等師範學校の卒業生にして、孰れも人格高く、學識深く、且つ經驗に富み、教育事業を以て、自己の天職と信ずる紳士、淑女たる所以なり、且つ高等師範學校出身者を採用せしことの多きは、小學

校教員たると共に、兼て中等教員たらしむるの必要に出でたるものなり」²⁷⁾

これは、同じ教員組織で一貫教育を実践し、しかもその成果を高めようとする寺田の教育方針を示したものである。つまり精華学校の特徴とは、初等教育から高等教育までの教員資格を有している教員を採用し、1クラスの定員を40名以下として（当時の公立・私立の学校では1クラス70～80名というのも珍しくはなかった）、子供達の個性に応じた教育ができるように、教員は子供達の進級と同時に持ち上がり方式を取るというものである²⁸⁾。寺田が実行した小学校での教員の持ち上がり方式とは、「小学校入学後最初の二ヶ年間は、同一の女教員を以て担任せしめ、第三學年生以上は、第六學年の終まで四ヶ年を通じて、終始同一の男教員をして担任せしむる」²⁹⁾もので、これは現代にも通じるところがある。

1906（明治39）年4月専任保育士・和田倉を採用し、同じ敷地内に精華幼稚園（男女共学）が併設された³⁰⁾。本園は、定員90名で3年保育、保育料は月額1円50銭^(注31)で認可されている。初年度の入園者は男女合わせて30名であった。開校2年目を迎えた小学校は、新入学生19（男子10・女子9）名、2年生は転校生も含めて11（男子8・女子3）名となり、教職員組織に主事という新たな職が設置され、日本体育会体操学校教員であった田代勝之助³¹⁾がその任に就いた。この年、幼稚園の併設が行われたことで、次年度以降の教室を確保しなければならない状況が生じ、7月に2階建て校舎が増築された。

1907（明治40）年に入ると、小学校3年生以上の生徒に英語の随意科目が設けられ（週2時間程度、放課後に学習）、外人女性教師が採用された^(注32)。また、幼稚園児が60名に増加したことを受けて、保育士を2名に増やした。翌年には、園児83名・児童81名となり、ようやくこの年あたりから赤字続きの学校経営が徐々に好転するようになる。設立から3年が経過し、教育方針や内容が受け入れられたのであろうか、いずれにしても精

華学校の認知度は高まり、1908（明治41）年以降は小学校の新入生募集定員40名を上回る入学希望者が集まることもあった。

小学校の第1期卒業生を迎える時期にあわせ、1911（明治44）年4月に文部大臣（小松原英太郎）の認可を得て精華学校敷地内に高等女学校が開設され、校名を九段精華高等女学校とした³²⁾。明治・大正期の新聞や雑誌において、精華学校の評価が度々掲載されているが、例えば、「同一の学校内に幼稚園、小学校、中学校、高等女学校の教科を設け、普通教育の全階級を具備したるは恐らく我國唯一のものなるべくして…中略…而して殊に『ナニ子供の事』と輕蔑する悪癖ある我國に於て、此種の私立學校を經營し、前途多望なるに至りしは、我教育社會の一大事實として報ずるに足るべく、其詳細は輕々に看過すべからざることなり」³³⁾という記事に見られるように、系統的な教育を施す教育機関が少なかった当時の日本の教育界において、同校は貴重な存在価値を有していたと判断すべきであるし、極めて先駆的な役割を果たした学校の一つとして位置づける必要がある。

寺田は高等女学校設立時に、父兄の要望もあって男子中学校の併設を検討したが、校地の問題や学校経営の視点からこれを先送りし、「賢母良妻の養成は、我邦各家庭の現状に照らし、最も急務を感ず」³⁴⁾として女子に対する教育を当初の計画通り優先した。九段精華高等女学校の入学に関する内規によれば、①入学できるのは善良なる家庭の子女で自宅から通学できる者、また②学校が認めた職業につく家長の子女で言語挙動に優れた者、③良妻の教育を施すために将来独立して生活する希望を持つ者は入学できない、④修学年限は5年+補習科1年で5年生以上は幼稚園保育の方法を体験する、⑤1クラスの定員は40名以内、⑥授業料は1か月3円、と規定されている³⁵⁾。入学試験は本人の筆記試験と同等に、保護者の面接にも大きな比重が置かれていた。これは、幼稚園から高等女学校まで共通した方針でもあった。

1912（明治45）年に経営母体となる精華財団が設立されたことによって、同校の経営は安定期に

入ったと考えられる。高等女学校の併設で精華学校に通う子供達の総数は増加の一途をたどり、それに伴って1914(大正3)年には教室棟の増築が行われ、最終的に1階建て教室棟3棟・2階建て教室棟4棟・雨中体操場兼講堂・運動場などを有する学び舎となった。1917(大正6)年には幼稚園51名・小学校280名・高等女学校161名の492名を擁する規模となり、子供達の増加に従って教員も増員され、同年には26名の教員が在籍していた。しかも開校当時と変わらず、そのほとんどが高等師範学校や女子高等師範学校の卒業生で、採用に際しては、教育実績があつて同校の教育方法(3-3を参照)を実践できる中堅の教員を対象としていた。その中には、28年間勤務した童謡詩人として著名な葛原しげる^(注33)なども含まれており、「東京市内に学校多しと雖も其教員の全部が、殆ど兩高等師範学校の卒業生なることは他に比類なきことならん」^(注36)と報じられるほど、同校の特色の一つであつた。

教員採用や教育体制に関する開校時からの方針は、寺田の死去以後も、湯本武比古・尺秀三郎^(注34)・丸山環^(注35)の歴代校長に引き継がれていく。しかし、精華学校は1945(昭和20)年3月の空襲によって校舎が全焼し廃校となり、最後の卒業式は焼け跡で行われ、その後校舎跡地は米軍に接収されてしまう^(注37)。一貫教育を受け九段精華高等女学校を卒業した生徒の中には、鹿島建設社長を務めた鹿島卯女^(注38)、十文字学園理事長や金門製作所会長を務めた十文字(旧姓・堀切)良子^(注39)、日本の女性運動家・民主運動家として著名な榎田ふき(旧姓・山口)^(注40)、1936(昭和11)年ベルリンオリンピック飛び板飛び込みで6位に入賞した井川(旧姓・大沢)政代・同大会高飛び込みで4位入賞の西沢礼子(旧姓・大沢)の姉妹^(注41)などがある。

3-3. 教育方針と課外体育活動

精華学校の教育の根底にあつたのは、「身體の健全なる發育に努め、品性を陶冶し、良習慣を涵養し、知識技能を授け」^(注42)ることによって紳士淑女を育成しようというものである。そして確実な

成果を得るために、教育方法にはヘルバルト教育学の手法が導入され、教員からの一方通行で知識や技能を教え込むのではなく、子供達が興味や関心を持って意欲的に学習へ臨むようになるために、「教育の基礎は個性に在り」^(注43)との信念から、園児・児童・生徒一人ひとりの個性を観察して長所短所を把握した上で教授することに重きが置かれていた。この教育方法と、小学校から高等女学校までを同じ教員組織で展開させたことは、まさにヘルバルト教育学の「管理」に相当する。また、指導の場面では「自由主義と關涉主義との中間」^(注44)を取った、いわゆるヘルバルトが主張した権威と愛情をもって実施され、さらには個別指導プログラム^(注36)(ヘルバルトのいう「訓練」の一つ)も実施されている。道徳的品性の陶冶を教育の目的にしたヘルバルトの影響は、1910(明治43)年に制定された校訓十箇條にも表れている。精華学校校訓は、以下のとおりである。

- 「一、忠孝を重んじ、信義を尚ぶべし
- 一、國法を守り、命令に遵うべし
- 一、運動を務め衛生に注意すべし
- 一、誠實を旨とし、禮節を重んずべし
- 一、勤儉を主とし、華美を戒むべし
- 一、規律を正しくし言行を慎むべし
- 一、公德を尊び、寛恕、友愛、從順の徳を養ふべし
- 一、責任を重んじ、實行を期すべし
- 一、學藝を勉勵し、智能を啓發すべし
- 一、善く遊び善く勉め、獨立自營の精神を涵養すべし」^(注45)

ヘルバルト教育学とは、ドイツの哲学者・心理学者・教育学者であつたヘルバルト(J.F. Herbart, 1776-1841)が、教育の目的を倫理学から方法を心理学から体系化したものを、ヘルバルト学派(Herbartianische Schule)が継承・発展させた理論であり^(注46)、日本においては1887(明治20)年頃から紹介され始め、1889(明治22)年あたりから帝国大学や高等師範学校で導入されるよ

うになり、その後全国の師範学校へと波及していった⁴⁷⁾。精華学校でヘルバルト教育学が実践されたのは、寺田と湯本が揃ってその意義を認めていたからである。寺田は文部官僚時代にヘルバルト教育理論について注目したと考えられるし、湯本はドイツ留学を通じてその内容を理解し、著書『新編 教授学』(1895 紅梅書屋)や雑誌「教育時論」でヘルバルト教育学の普及活動を展開している。

一方、スペンサー(H. Spencer, 1820-1903)の三育(知育・徳育・体育)主義の教育論が日本で定着する中、精華学校では第1に体育、第2に徳育、第3に知育という大胆な教育方針を打ち出し⁴⁸⁾、知育偏重体育軽視の当時としては珍しく体育を重視した教育を展開した。この方針は、九段精華高等女学校においても貫かれた。寺田は保護者や新聞・雑誌の取材に対しても、あるいは来賓を集めた記念式典^(注37)においても、体育の重要性と体育重視の方向性について繰り返し明言し続けている。彼の思いは、先に示した校訓十箇條の3番目に運動の項目がうたわれていることから慮ることができる。

体育重視を全面に押し出した教育を実現するために、同校では次のようなハード面の整備が図られている。①学校設立間もない時期で教員数が10名にも満たない時でも2名の体育教員を採用するなど、常に複数人で体育を指導する体制を整え、しかも日本体育会体操学校の教員を兼任させた。②経営状況が安定をしていない1909年に、運動場のほかに2,000円を投じて雨中体操場を建築、その5年後には高等女学校専用の体操場を増築した。③保護者から寄付金を募り体育器具や、明治30年代から出版が増加し始める体育書や雑誌⁴⁹⁾を十分に備えた。体育重視の教育方針をより徹底させ、教育目的にかなった子供達を一人でも多く育成するために、ソフト面でも工夫が凝らされた。正課の体育授業はもとより、それ以外に運動の奨励を目的とした運動会・転地修養会(4-2, 3, 4, 5を参照)・遠足会・早朝体操などの課外体育活動も積極的に実施している。

第1回の運動会は1908(明治41)年に開催され、

それ以後毎年1回秋季に精華学校運動場で開催されている。同校の運動会の目的は身体の鍛錬と精神の修養であり、これは「体育と、徳育との実践場」⁵⁰⁾であったことを示唆している。したがって、運動会であるからといって特別に会場を飾り付けてはいないし、種目も団体で行う遊戯や体操が中心で、競技的性格を帯びた種目は少なかった。寺田にとって、運動会とはあくまで平素の授業の延長線上にあるもので、興味本位の種目や企画は必要なかったのである。このことは、明治30年代後半から文部省体操遊戯取調委員会が、運動会本来の目的である体育奨励のために、娯楽本位・競技本位・虚飾本位の状況を是正しようとした動き⁵¹⁾にも影響されたものと解すことができよう。同校の運動会種目の中には、井上八郎を始め体育教員が独自に創作したのものも多くあった^(注38)。高等女学生が参加するようになると、技術を要する種目や女性美を追求した体操・ダンスも組み込まれるようになる。また、同時期から体操学校男子部・女子部の模範演技が実施されている。同校の運動会は来賓や記者からの高評価を得ることが多く^(注39)、日常の教育水準の一端を窺い知ることができる。

遠足会は、設立当初から毎年春と秋の年2回ずつ実施されている。当時の日本では、郊外教授などという名称で宿泊を伴うケースもあったが、同校の場合は小学生から高等女学生まですべて日帰りであった。ただし、1日とはいえ子供達の運動量はかなり多く、往復の徒歩以外に山野跋涉・名勝旧跡の探索・遊戯運動などが取り入れられていた。遠足会の実施にあたっては安全性への配慮が徹底され、目的地の選定には毎回事前に校長と複数教員が候補地へ赴き、往復の道路や橋梁、現地一帯の地形や伝染病流行の有無などの調査が行われ、しかも中央气象台や目的地の気象測候所に気象状況の照会をしながら実施された。

子供達の健康増進を図ることを目的に、毎朝約10分間の早朝体操が実施されるようになるのは1912(大正元)年からのことである。早朝体操とは寺田式体操、つまり同年に彼が著した『寺田式

国民健康法』(開発社)の中で示した「冷水摩擦」・「深呼吸」・「運動」の3つを組み合わせた体操を行うことであった。寺田式体操は彼が独自に創作したものではなく、当時世界中で訳本が出版されていたミュラー(J.P. Müller)の『家庭体操』(1904)を、寺田が日本人向けに順序・時間・組み合わせ方をアレンジしたものである。寺田はこの体操を体育の授業や運動会にも導入した。さらには学校教育と家庭教育の連携・連動を大切にしていたことから、この本を全家庭に配布して家庭においても実践させていた。その際、幼稚園児と小学校低学年の児童へは冷水摩擦を、それ以上の児童生徒には学校で行っていた体操を繰り返して実施するよう奨励していた。

精華学校における体育とは広く健康や衛生をも含んでおり、当然子供達の衛生や健康管理も注意深く進められた。校舎建築の際には、教室や廊下に適度な採光や通風が得られる設計が施されていたし、机や椅子などの設備にも配慮が加えられていた。また、校医のほかには学校指定の内科・眼科・耳鼻咽喉科・歯科の専門医を嘱託して、定期的な健康診断を行いながら子供達の健康維持に努めている。さらに寺田は、子供達が学校および家庭において守るべき74項目の衛生上の注意点を「生徒衛生上の心得」としてまとめ、家庭と連携して毎日の日課とさせていた。この心得は、寺田が1921(大正10)年に著した『学校より家庭へ』(精華学校)の中にも掲載(pp.242-245)されている。

精華学校では確かに体育重視の教育が展開された。しかしそこでは、徳育とセットにしたかたちで方針が示され教育が展開されている。また、三育主義の最後に位置させた知育を、だからといって軽視したわけでは全くない。前述のようなヘルバルト教育学を導入し、個人を優先した教育方法の確立をもってすれば必ずと学習効果は上がると考えられていたのであり、したがって同校の教育は、知育・徳育・体育が横並びで展開されたと考えるのが妥当であろう。

4. 精華学校転地修養会の実際

4-1. 明治期の国内外における林間学校の状況

精華学校の転地修養会とは、長期休暇中の一定期間(2週間~4週間)に自然豊かな場所で宿泊形態を取りながら、子供達的生活習慣の改善や体質・体格・体力の向上を目指して健康・体育プログラムを展開する課外教育活動である。現代的な名称で表現するならば、それは「林間学校」というのが妥当である。ヴァルトシューレ(専用施設常設型林間学校)やフェリエンコロニー(休暇集落臨時施設型林間学校)という名称で、欧米を中心とした海外で先行して展開されていたこの林間学校の事情を簡潔にまとめると次のようになる⁵²⁾。

小田俊三は、ヴァルトシューレやフェリエンコロニーの起源は、18世紀中期にイギリスで結核の予防や治療のために設置された海兵療養所まで遡ることができるとしている。そして、この療養所で結核治療の成果が示されたことで、その後ヨーロッパ各地で同様の病院が設立されるようになり、この流れが19世紀中頃から子供の結核予防を目的としたヴァルトシューレやフェリエンコロニーの実施につながっていくのである。その最も早い時期のものは、1850(嘉永3)年にロシアのセントペテルスブルグやバルチック沿海州で実施されたフェリエンコロニーである⁵³⁾。1853(嘉永6)年にはデンマークのコペンハーゲンでも虚弱児童を対象に実施され、その後1876(明治9)年にスイスのアッペンツェルの山間で行われたフェリエンコロニーで大きな成果を上げたことで、その効果がヨーロッパで広く認められるようになった⁵⁴⁾。

ドイツにおいては、スイスでの実施と同じ時期から国内全土で同様の試みが行われるようになり、1881(明治14)年にはベルリンで「休暇転地奨励会」の会議が開催されるに至った。同時期にブレーメンでは「ドイツ夏期休養連合会」や「ベルリン家庭衛生養護会」が結成されるなど、フェリエン

コロニー実施のための国内組織が急速に整えられていった⁵⁵⁾。1888(明治21)年にスイスのチューリッヒで「夏期殖民万国会議」が開催されたことを契機に、以後ドイツ・フランス・スイス・デンマーク・イギリスを中心としたヨーロッパ諸国で本格的にフェリエンコロニーが普及していく⁵⁶⁾。1907(明治40)年のドイツでは、フェリエンコロニーを実施する協会が80団体以上も設立をされて、この年の参加者総数は36,000名ほどにものぼった。

フランスでも数多くのフェリエンコロニーが行われ、例えば1905(明治38)年のパリでは、市が実施したものに約6,400名が参加をしているし、21か所の私設の開催には延べ7,000名ほどの参加があった。また同年の地方都市でも、公設・私設合計約100か所のフェリエンコロニーに10,000名以上が参加をしている。同時期のスイスにおいても、100か所以上で実施されるほどの普及状況であった⁵⁷⁾。

テントや宿泊施設、学校の校舎などを利用して宿泊するフェリエンコロニーがこのように普及・発展し始めると、専用施設を常設して実施するヴァルトシューレも、1900年代初頭から並行して急速な広がりを見せるようになる。イギリスでは、1907(明治40)年に常設型の林間学校としてオープンエアスクール(Open Air School)が創設された⁵⁸⁾。これがアメリカに伝えられ、1908(明治41)年あたりからアメリカでも林間学校が盛んに実施されるようになった⁵⁹⁾。19世紀中期から欧米で盛んに実施された林間学校は、疾病を抱えた子供や虚弱体質の子供を対象として行われたものである。

一方明治期における日本において、欧米で普及していたフェリエンコロニーやヴァルトシューレが伝えられたのは、杉森守邦・野口穂高・渡辺貴裕らによると⁶⁰⁾、宮城県立宮城医学校校長を務めた瀬川昌蒼が、ドイツ留学中の1888(明治21)年に辻新次(当時文部次官)あてに、同国の学校衛生事情報告書の中でふれたものが最初であった。その後瀬川は、1893(明治26)年に『学校衛生法

綱要』(發兌書林)を出版して啓蒙を行った。1899(明治32)年には衛生学者で京都帝国大医科大学学長を務めた坪井次郎が自著『学校衛生書』(金港堂)の中で紹介を行った。彼もまたドイツ留学経験者であった。これらよりも詳しく紹介したのは、文部省から派遣されドイツに留学をしていた服部教一^(注40)で、彼が通信文で報告したものが1906(明治39)年の官報に掲載されたことでその存在が国内で知られるようになった。

しかし、「林間学校奨励補助ニ関スル建議案」^(注41)が可決されたのが1921(大正10)年であるように、文部省を中心とした国家レベルでの奨励が明治期には行われていなかったことからすると、上記3名のドイツ留学経験者による紹介や啓蒙によって林間学校が国内で広く認知されていたとは考えにくい。医師や一部の教育者が興味を示した程度であったとするのが妥当であろう^(注42)。事実、明治期の日本で実施された林間学校は、以下のとおり僅かしかない⁶¹⁾。

- ① 精華学校「転地修養会」、1907(明治40)～1909(明治42)年
- ② 東京市下谷区小学校「夏期聚落」、1907(明治40)年
- ③ 東京府立第三中学校「夏期学校」、1909(明治42)年
- ④ 東京市本郷区「野外学校」、1911(明治44)年

日本における林間学校の普及は大正期まで待たなければならないが、大正期に入ると全国で実施されるようになり、急速な広がりを見せていくことになる。文部省が林間学校の実施方法を示したり^(注43)、実施状況の調査^(注44)を行ったりしながら奨励を始めるようになるのは大正期中期以降である。

4-2. 精華学校転地修養会の実施までの経緯と実施概要

精華学校における転地修養会の実施計画は、明治30年代後半から寺田と当時同校の学校医であっ

た小児科医の小原頼之^(注45)との2人によって準備され始めた。当初は、日本に紹介された林間学校の情報を有していたと思われる小原の方が、医師としての立場から積極的であったようで、寺田に対して「ドイツでは近來フェリエンコロニーが盛に發達して來て、教育上極めて良効果を得つゝある、依つて自分は試みに自家の三人の子供を、鎌倉に連れて行って修養せしめた所が、精神上身體上に、亦大良果を得て喜んでをる、依つてドウかこのフェリエンコロニーの方法沿革等に就て、ドイツの實況を聞きたい」^(注62)と、調査の依頼をしている。寺田も小原と同様に、自分の子供を避暑地に連れて行き、體質や体格の改善を行った経験があったためにこれに共感をし、ドイツを中心に欧米の学校衛生に関する著作物を取り寄せて細部に亘る調査を行った。

この調査を通して、寺田は林間学校に精通していくと同時に、次第にそれに魅せられていったと考えられる。特に、1876(明治9)年にスイスの宣教師ワルター・ビオン(Walter Bion)によって創立されたフェリエンコロニーが、当時欧米諸国中に伝播されるほどの隆盛をきたしていたこと、そしてそこではまさしく寺田が理想としていた心身共に均整の取れた人間の育成に通じる効果が期待できることを知る^(注63)。中流以上の子女が通う精華学校では、体重や胸囲が全国平均よりも劣り、体力や精神面でもやや虚弱な児童が多い状況を抱えていたこともあり、その打開策という意味も含めて、寺田はドイツの林間学校をモデルとして実施することを決心した^(注64)。

具体的な計画を立てるにあたって、まず寺田は実施する林間学校の名称を「転地修養会」と決めた^(注46)。そして、常設の施設を建設して行うヴァルトシューレではなく、既存の宿泊施設とその周辺の自然環境を利用するフェリエンコロニーの形態を選択した。寺田は、ヴァルトシューレを林間学校、フェリエンコロニーを転地修養会と訳し、それぞれの特徴を次のように説明している。林間学校は、「これは常設を通例とし、身體の虚弱なる児童、並に低能児童を收容して、一定の期間普

通教育を授け、併せて身體を健全ならしむる等、即ち普通以下の児童を教養して、以て少くとも普通に近付かしめるといふことを目的とする」^(注65)ものであるのに対し、転地修養会は、「常置のものではなくして、多くは夏休などを利用して、山の空氣の純良なる處に子供を伴ひ、此所で子供を修養せしめるのであって、つまり市街地の空氣の悪い所にある學校をば、臨時に山の中に移すといふ仕組みであつて、然かも平生學校で教へてをった事をば、天然界及人事界の出来事に應用せしめ、こゝに理論と實地との、充分なる調和を得しめようといふを主眼とす」^(注66)のものである。

実施するための組織や指導内容については、前節で述べたとおりドイツに数多あった協会の中から、シュトゥットガルトフェリエンコロニー協会^(注47)のものを参考にした。寺田によると、同組合の実施組織は「児童の他に、主宰會頭一人、教員一人、助教員一・二人(内一人は大槻女教師)、料理番長一人、料理人一人、料理番一人」^(注67)で、参加児童は20～30名を定員としていた。また指導内容は、「學科は毎日二時間、午前涼しい内に課し、その後は教員これを引率して、或は動植物の採集研究、或は鑛物地質の採質研究を爲さしめ、或は散歩し、或は遊戯等を行ひ、夕刻は入浴せしめ、後に教員より有益なる話談を爲して、生徒をしてこれに基いて各自の意見等を陳べしめ、以て雄辨の稽古をさせる」^(注68)のものであった。

転地修養会の計画立案の過程で、小原と湯本学監には実施の承諾を得ていたようであるが、計画案が完成をすると職員會議を開催して、2名以外の教職員全員を対象に、実施そのものの是非や計画内容に対する審議を行った。寺田は、「我邦に於て、自他共に無經驗の新事業を舉行するに當りては、假令校長の統督其宜しきを得、校醫の盡力至らざる所なきにもせよ、實際児童訓練の局に當る教員諸君の深厚なる同情を博し、熱心なる賛成を得るにあらざれば、到底良効果を收むこと能はざる」^(注69)と考えていたのである。日本において前例がない転地修養会の実施を慎重に進めた結果、田代主事以下教職員達から以下のような回答を見た。

表1 精華学校転地修養会の概要

	開催年月日	期間	開催場所	参加児童	引率者	活動内容
第1回	1907(明治40)年 12月25日 ～ 1908(明治41)年 1月7日	13日間	神奈川県鎌倉 坂ノ下 (海月楼)	25名	9名 教員・医師 看護師・付添人	・学科学習(日課) ・徒歩競争(日課) ・体操遊戯(日課) ・名勝旧跡散策(日課)
第2回	1908(明治41)年 7月29日 ～ 8月23日	25日間	群馬県 北甘楽郡 妙義山 (妙義神社)	32名	18名 教員・医師 看護師・調理婦 付添人	・呼吸運動(日課)・お伽噺(日課) ・学科学習(日課)・茶話会(日課) ・室外運動(日課)・女禮式(日課) ・団体運動(日課)・登山(イベント) ・写生会(日課)・お伽芝居(イベント)
第3回	1909(明治42)年 7月25日 ～ 8月21日	27日間	栃木県日光市 山内日光山 (教光院・ 法門院)	33名	20名 教員・医師 看護師・料理方 炊事婦・使丁 付添人	・呼吸運動(日課)・花火(日課) ・学科学習(日課)・音楽鑑賞(日課) ・団体運動(日課)・読書(日課) ・室内運動(日課)・遠足(イベント) ・談話会(日課)・お伽会(イベント) ・お伽噺(日課)・肝試し会(イベント)

「轉地修養會の兒童に益あるは、吾輩の夙に之を校長に聞く所なり、今や本校の基礎既に成り、諸設の施設既に其緒に就けり、此時に於て轉地修養會を舉行せらるるは、誠に好機を得たるものなり、生等固より何等の經驗なしと雖も、校長の指導を奉じ、奮ふて献身的努力を致し、誓ふて其成功を期すべし、速に實行の議を決せられん」⁷⁰⁾

結果として1名の反対者もなく、全会一致で実施と計画案は承認され、精華学校での転地修養会の開催が決定した。そして、1907(明治40)年に第1回が開催され、以降1909(明治42)年まで連続して実施された。参加したのはいずれも精華学校の小学生で、引率スタッフは教職員・医師・看護師・調理関係者・付添人(保護者)などであった。実施場所は毎回変更されている。3回の転地修養会の概要は、表1に示したとおりである。

4-3. 精華学校第1回転地修養会の内容

第1回転地修養会は、1907(明治40)年12月25日から1908(明治41)年1月7日までの2週間、冬季休業期間を利用して神奈川県鎌倉坂ノ下で開催された⁷¹⁾。冬季休業を利用したことの理由は確

認できないが、実施の20日ほど前の東京朝日新聞の朝刊(12月7日、6頁)で、「フェリエンコロニーは冬期休暇を利用せよ」と題した小原の談話が掲載されていることから、医学的な理由などから小原が寺田に進言したのではないかと推察される。

宿舎は坂ノ下海岸近くの「海月楼」であった。「海月楼」は保養として利用されることも多かった旅館である^(注48)。精華学校は本会のために宿を貸し切り、転地修養会本部も同宿舎内に設置した⁷²⁾。親元を離れた児童の様子をつぶさに観察しながら、万全な状態で健康管理と指導を施すための策と推察できる。

参加した児童は、男子12名・女子13名の25名で、その内訳は1年生4名(男子1・女子3名)・2年生11(男子5・女子6名)・3年生10名(男子6・女子4名)である⁷³⁾。学校の設立が1905(明治38)年であったために、最高学年は3年生であった。参加児童は、転地修養会開催に対する父兄への説明を行ったのちに、募集によって集められた。参加者25名というのは、その年度の全校生徒の約半数にあたる。

同行した指導・管理スタッフは、寺田を含めた教員3名(1名は女性教員・1名は主事で体育教員であった田代と推される)・学校医1名・看護

師1名・付添人(保護者)3名の9名であった⁷⁴⁾。シュトゥットガルト協会の組織との相違点は、専門的な健康管理を行える医師や看護師を同行させたこと、児童の身の回りの世話をする母親を若干名付添させたこと、食事の提供を旅館に依頼したために(メニューはスタッフ側が決定)料理に関わるスタッフを省略したことなどである。当時の内外の林間学校の状況からして、十分な指導・管理体制が整っていたとしなければならないだろう。

第1回転地修養会の内容は、寺田によって次のように示されている。

「朝夕二回學科の復習を課したる外は、附近の名勝舊蹟を探らしめ、或は徒歩競争を試ましめ、或は體操遊戯を爲さしむるを以て日課と爲し、務めて身神の休養を圖れり、且起臥飲食等一切の生活法は悉く規則整然たらしめたり」⁷⁵⁾

つまり、生活習慣や体質の改善・体格と体力の向上などを目指して、毎日規則正しい生活を基本としながら、食事・勉強・身体運動・休養に力点が置かれたプログラムが実施されていたのである。その際のスタッフの献身的な取り組みや子供達の様子について、次のような報道がなされている。

「教員看護婦諸氏の慈愛ある保護慰藉を受けて、晝間は共に起居し共に戯れ共に飲食し…中略…夜は或は抱かれて眠り、或は便通の爲に醒起すれば、則はち不寝の番の教員ありて、親切に保護せらるゝを以て、始め二三日中こそ多少の混亂不安もありたれ、四五日を過ぎて後は、何れも嬉々として其堵に定んじ、公共的動作と、自修的規律と、完全なる娛樂に依り、湘南の海濱に児童の天國を現じたり」⁷⁶⁾

2週間に及ぶこうした活動によって、参加した子供達には心身面や生活習慣などにおいて目に見

えた変化が表れたとされている。同行した小原は、参加児童一人ひとりの発育状況を参加前からデータ管理をし、転地修養会後との比較を行って、結果について小児科学会の「児科雑誌」で学術論文として発表している⁷⁷⁾。それによると、本会に参加した児童の体格は、強壯の者6名・普通の者13名・薄弱気味の者4名で、栄養状態は良好な者が10名・普通の者が7名・不良気味の者が6名であった(実施期間中に2名が病気になってしまったので総数は23名)。親元を離れた不慣れた生活であったにもかかわらず、それらのほとんどの参加者に体重の増加が見られ、最も増加した者は2週間で1キロの増加を示したとされている。本会での食生活は、朝食はご飯・味噌汁・卵料理・牛乳1合、昼食はご飯・味噌汁・魚か肉料理など、補食としておやつで牛乳1合、夕食はほぼ昼食と同様かそれより少し軽めであったようである。

体重面以外にも、衣服の着脱や起床・身の回りの整理を始めとする自治的な精神の向上が見られるようになったり、食生活の面では「良家の子女にして肉類、鶏卵、牛乳等の磁養物を嫌へる爲め、營養不良に陥り、又食事の好悪極端なりしものありしが、一週間後よりは喜んで與へられたる副食物等を食するに至り、内二名の如きは絶対に嫌へり牛乳さへ喜に至れり」⁷⁸⁾という変化があったりと、生活習慣全般においての改善が確認されている。

ある意味試行的な状態で実施されたであろう初めての転地修養会は、それでも自治的精神や体格の向上、さらには生活習慣の改善という点で一定程度の良い結果を残した。しかしそこには、①実施期間が短かったこと、②冬季に実施したことで、山間ではなく海岸近くを会場にせざるを得ず、活動環境が十分ではなかったこと、③料理の提供を旅館に任せただために、希望する献立が反映されないことがあったこと、④期間中に2名の病人を出したこと、など幾つかの反省点も含まれていた⁷⁹⁾。

この実施期間中には、参加児童の父兄・教育関係者・報道記者などが参観や視察に来ていたよう

である。因みに、この転地修養会にかかった総費用額は498円であった⁸⁰⁾。作者や作成の時期は不明であるが、以下のような「第1回転地修養会の歌」も作られている。

「眞白き砂を友と踏み、みどりの波を友と見
つ、清き空気を身に浴びて、遊ぶ吾等の楽し
さよ、うつくしの磯よき旅よ

やがて歸校の時來なば、肉肥え色のうは
しく、われら待ちます父母の、いかに嬉しと
見給はむ、うつくしの磯よき旅よ⁸¹⁾(読点は
筆者による)

第3回がそうであったように、この歌は実施前か実施中に作られ、期間中全員で合唱していた可能性がある。

4-4. 精華学校第2回転地修養会の内容

第2回転地修養会は、1908(明治41)年7月29日から8月23日までの約4週間の日程で、群馬県北甘楽郡妙義山で開催された⁸²⁾。前回の反省が生かされ、日数を倍増させて夏季休暇中に山間で実施された。実施場所の選定においては、先ず静岡県沼田方面での調査がなされたが適地を見つけれず、次いで神奈川県箱根町での調査を行い、一旦は足柄郡箱根町湯本の早雲寺での実施が適当であると判断されたものの、小田原周辺に腸チフスの患者がいることが判明し断念、その後数か所を探索した結果妙義山に決定したという⁸³⁾。3-3で先述した、同校の遠足会の目的地選定と全く同様の視点からの検討であった。

宿舎および本部は、妙義山麓にある妙義神社社務所に併設されている旧御殿を利用し、現地までは参加者全員で上野駅から松井田駅まで電車で行き、松井田駅からは約4キロの道のりを歩いたとされている⁸⁴⁾。第2回の参加者は、児童32名と引率スタッフ18名の総勢50名であった。スタッフは、寺田・湯本・田代・井上・佐土原・児玉の6名の教員、小原・鈴木の2名の医師、看護師、調理婦、付添人であり⁸⁵⁾⁸⁶⁾、前回と比べると教員・医師・

付添人の数が増えたこと、栄養バランスが取れた食事を提供するために調理を担当する女性を同行させたことなどが相違点である。なお、第2回転地修養会には、「教育時論」の記者が同行取材をしている。

子供達の日課は、「朝食前に呼吸運動を課し、學科は一時間半を限度として朝食後に於てし、日記は毎日綴らしめ、算術國語は隔日に復習し、又女兒には時々女禮式をも示教いたし候。此他は多く室外運動とし、境内にて随意に遊ばしめ、寫生會等をも舉行す、而して三時の間食後は團體運動を課して、幾分の所勞あらしめ。以て身體の鍛鍊に資し終りて入浴せすむる…中略…お伽、茶話會を催して、八時半床に就かしむ⁸⁷⁾」というものであった。

このような日々の日課とは別に、中之嶽への登山やお伽芝居も実施された。運動会も企画されたようであるが⁸⁸⁾、実施の有無は確認できない。中之嶽への登山は、医師の診察で許可された28名を対象に8月15日に挙行され、「八時過ぎ妙義の會場を出發し、山麓の細道を行くこと十五丁⁸⁹⁾で再び医師の診察が行われ、結局6名が「一本杉と稱する頂上まで二十丁、其嶮悪壯者も避易する山路なるが、事もなく之を越えて一本杉に着し⁹⁰⁾、午後3時過ぎに帰舎した^(註49)。お伽芝居は8月4日に行われ、3年生の「鬼だましの場」と4年生の「桃太郎」が演じられた。

妙義神社周辺は、転地修養会の報告によれば⁹¹⁾、標高が高く朝夕の気温が24度前後で日中でも29度を超えることがなく、木立が立ち並び溪流が流れ、空気が澄み渡り林浴効果が十分に得られる環境で、しかも水も清らかで子供達の健康・衛生環境は十分に良いものであった。このような環境下で約4週間実施された第2回転地修養会は、児童の心身や生活習慣の面において前回以上の効果を残して無事終了した^(註50)。前回終了後から僅か半年の準備期間ながら、反省点は十分に克服されていたと評価できる。

ただし、新たな問題点が出現したことも事実である。成果を高めるために標高が高く自然豊かな

林間を開催地としたことで、生活物資の確保に困難が生じたことである。特に50人分もの食事を栄養面に配慮しながら4週間も提供するための、食材や調味料などの現地調達に困難であったようで、寺田自身が味噌・醤油・肉類・野菜類などの購入のために何度も東京へ出向いている⁹²⁾。今回は病人を出すことはなかったが、石段で転んで縫合しなければならぬ怪我をした男子児童が1名いた。

4-5. 精華学校第3回転地修養会の内容

第3回転地修養会は、1909(明治42)年7月25日から8月21日の約4週間、栃木県日光市山内の日光山で実施された⁹³⁾。交通の便が悪く生活物資の供給に支障をきたした前回の教訓も含め、①なるべく山間部で空気が清純であること、②宿舎として利用する健全な建物を有していること、③活動環境が衛生的でかつ整っていること、④物資の調達が便利であることなどを条件として、静岡県御殿場や江尻海岸を始めたくさんの候補地の踏査に4か月もの時間をかけて開催地が決定された⁹⁴⁾。日光山での開催にあたっては、中山巳代蔵栃木県知事の尽力に負うところが大きかったようである⁹⁵⁾。

本部は、輪王寺に近接して広い台所と風呂を完備した「教光院」に置かれた。ここに、看護婦室1部屋・生徒室3部屋・事務室3部屋、納戸1部屋が配置され、付属の隠宅が休養室とされた⁹⁶⁾。また、「教光院」と隣接する「法門院」に、食堂・女子の整装室・生徒室(4部屋)が配置された⁹⁷⁾。この「法門院」にも広い台所と風呂が備え付けられていた。寺院関係者によって、両寺院を行き来しやすいように急造の廊下が架けられたり、電燈の架設も行われ(精華学校で架設)、実施期間中の利便性と安全性が確保されている。

第3回の参加者は、33名の児童(男子24・女子9名)と、20名の指導・管理スタッフの総勢53名であった⁹⁸⁾。詳細な人数までは分からないが、第1回や第2回から連続で参加している児童も含まれている。指導・管理組織は、校長(寺田)・学

監(湯本)・教員5名(1名は主事兼体育教師の田代で訓練責任者、1名は女性教員)の7名の教職員と、医師1名(往復の道中には学校医が同行し、滞在中は現地の医師に嘱託)^(注51)・看護師3名・料理方1名・炊事婦5名・使丁(雑用に従事する用務員)1名・付添人2名の付属員13名である。5名の教員の職務は、「生徒の教養的方面を擔任するも、寺田校長及び田代主事は、舎内一切の指揮を爲し、かつ外部に對する交渉を行ひ、外來客の應接、視察員に對する待遇等を司る、實に目の廻る程多忙の職務である。又他の一訓導は主事を補助し、三訓導は各部長として専心擔任部の教養を司る」⁹⁹⁾のものであった。3名の教員が従事した担任部とは、すなわち3つに分けられた子供達のグループを意味しており、第1部は4・5年男子児童、第2部は1～3年男子児童、第3部は2～5年女子児童に分けられていた。寺田や湯本あるいは田代が担当した「外部に對する待遇」の中には、これまでと同様に報道関係者の取材や教育関係者・避暑中の家族などの視察対応が含まれていたが、今回の転地修養会には前回まで以上の訪問者(例えば8月10日には100名を超える訪問者)があったようで、取材に関しても「東京日日新聞」・「教育時論」・「体育」の他数社の記者が同行取材をしている¹⁰⁰⁾。

「体育」の記者によると¹⁰¹⁾、同行した付属員の中の看護師(看護婦長1名と助手2名)は、疾病や怪我が発生した時の応急処置や看護をする以外に、食事の良し悪しや分量などを毎回記録したり、交代制で就寝中の子供達の様子を徹夜で巡回確認することなども行っていた。また、料理方を担当したのは東京成女高等女学校の割烹教師で、炊事婦5名も在京の高等女学校の寄宿舎で働いている者であった。これらのことから、寺田が子供達の健康管理の強化に対して意欲的に取り組んでいたことの一端が理解できる。

子供達の毎日の活動は、寺田や記者の報告によると¹⁰²⁾¹⁰³⁾、6時起床、その後林間の散歩と呼吸運動、7時頃朝食(メニューは軽めで、ご飯・味噌汁・煮豆・牛乳1合、あるいはパンとコーヒー

牛乳など)、9時頃から11時まで日記の記入と算数の学習や読書、昼食(3食中最も栄養価の高いメニューで、ご飯・スープ・菜物・魚か肉を提供)、午後から団体運動、間食(牛乳と菓子)、16時頃まで室内遊戯、16時30分から入浴、18時頃夕食、その後談話会(寺田や教員による倫理上の談話や、輪番制による児童の談話)・お伽噺・花火・音楽鑑賞、20時就寝という盛沢山なものであった。また、3回目の実施を前に、文学博士佐佐木信綱^(注52)によって「精華学校転地修養会の歌」^(注53)が作られ、期間中は毎日全員で合唱していた。

前回と同様に、こうした毎日の活動以外に、お伽会・肝試し会・中禅寺までの遠足といった特別プログラムも実施された。お伽会は8月10日に、お伽芝居・英会話・談話・唱歌といった内容で行われた¹⁰⁴⁾。その様子は、「保晃會事務所楼上の大廣間を借り受け、お伽會を公開致し候。青山子爵。沙長驛長等を首とし、當地滞在避暑客の子女、百餘名参観致し候。…中略…何も大喝采にて、當日光町の爲には一種の印象を與へしこと、存じ候」¹⁰⁵⁾と報じられている。

肝試し会は8月8日の夜に実施され、「宿舎を去ること三丁余、杉木立の薄暗きあたりに提灯を點じて、其下到手帳と鉛筆をおき、之に記名して還らしむる」¹⁰⁶⁾という程度のものであった。参加児童の勇気を称賛しつつ、「歸京後は夜間『憚り』に行く時なども、女中を煩はす如きことは断じてこれあるべからざることを訓し」¹⁰⁷⁾て終会したという。

遠足は、前回の登山が危険を伴い、参加できる児童が少なかったことを受けて企画されたものである。8月13日に、29名の児童と湯本学監・教員・看護師・付添人を含めた総勢44名で挙行された。まずは50車両の人力車に分乗して、約2時間半をかけて山道入口まで進み、そこから徒歩で中禅寺まで行き、持参したおにぎりを食べて、写生会を行ったのち、往路と同じく徒歩と人力車で全員何事もなく無事に帰宿した(12時間の行程)¹⁰⁸⁾。

長期間でたくさんのプログラムを展開する転地修養会を円滑に実施するため、学習時間に必要な

道具、小児球突・鬪球・球弾を始めとする娯楽や遊戯・運動に関する道具、食料品、日用品、調理用具、寝具などの大量の必需品を揃えて事前に東京から送るなど、学校関係者の準備は大変だったと推される。これは参加児童の父兄とても同様で、児童には「寝具一組(毛布附)と被服類は正服、男女共靴、肌着五着、木綿浴衣五着、袷羽織一着、ネル單衣若くは袷一着、足袋一足、靴下若干、寝衣二着、駒下駄一足、麻裏草履一足、洋傘一本、日用品は手拭二筋、木綿手巾・若干、齒磨道具一式、石鹼一個、櫛(女)、リボン若干(女)、鼻紙、雜囊、箸(箱共)、学用品…中略…日常の遊道具」¹⁰⁹⁾といった大量の携行品が必要であった。

日光山における転地修養会は、指導・管理体制が前回までよりもさらに整備され、教職員や児童の経験値も高まった中で実施された。また、生活環境や活動環境さらには天候^(注54)にも恵まれ、これまでの中で最も良い条件で展開された本会は、「滞在中何等の事故なく、首尾能く修養の目的を達し、…中略…其効果は歸京後生徒の健康上及訓練上の成績に徴し、前二回に比し、一層良好なるを認めたり」¹¹⁰⁾という結果で終了した。

ただ1点、実施費用が予想を超えて高額となったようで、このことについて寺田は「此所はさすが日光で、食物は困らなかったが、物價は非常に高い、家賃丈けで四週間百五十円^(注55)と云ふので、蔬菜薪炭之に相應して高かったから、豫定は不足して、大分學校から補助することに成った」¹¹¹⁾と語っている。第3回の児童の参加費用は1名35円^(注56)で、物價の問題もあり33名から徴収した金額では、往復の交通費から4週間分の食事代、人件費、運営費全てを賄うことができないほど高額な実習費用が必要であった。

4-6. 精華学校転地修養会の歴史的評価

精華学校の転地修養会は、実施回数を重ねて同行スタッフの経験値も上がり、参加児童の心身への効果も安定的に残していたにもかかわらず、1909(明治42)年の第3回を最後にそれ以降は一度も実施されていない。しかし、その後も転地修

養会の計画を立てていることや、実施の意思があったことは、雑誌の記事などから確認することができる^(注57)。

実施に至らなかったことの明確な理由については、史料の制約から現時点では詳細に解明することはできない。ただし、寺田が掲載した雑誌記事¹¹²⁾¹¹³⁾によって、主な理由は十分に推察できる。それは、実施にはかなりの費用が必要であったこと、実施理念に基づいて展開できる会場を見つけるのが非常に大変だったことである。寺田は、特に費用に関して、欧米の林間学校が市町村からの補助金と慈善家などの寄付金によって賄われていたのに対して、参加費と学校の経費だけで実施しなければならないために、「将来経営したいと思ふのであるが、これは澤山の金を要する事であるからして、中々近い中には出来さうに無いことを遺憾」¹¹⁴⁾であるとしていた。同校では、3回目の実施の2年後に高等女学校を開校しており、校舎の大幅な増築などが必要であったことも実施の断念を作り出した要因の一つと考えられる。

3回しか実施できなかったことは、やはりある意味限界として捉えなければなるまい。学校経営にエネルギーを注がねばならない時期であったがために、寄付金を集めることに長けていた寺田をしても、衛生面や健康面を最大限考慮した宿舍や活動環境を求め、子供達を指導・管理する体制を十二分に整え、しかも4週間の日程で実施することに必要な費用や実施場所の問題を克服することはできなかったのである。それでも同校の転地修養会は、日本では林間学校に対する認知度が高くなかったと思われる時期に欧米と同様のレベルで展開されたこと、子供達の心身面で一定程度以上の効果をもたらしたことに對しては大いに評価をしなければならない。この点においては、精華学校の転地修養会が欧米先進国の例にならって、当時としては最も進んだ林間学校であったとする岸野¹¹⁵⁾の評価を裏付けることができた。さらに、杉浦・渡辺・野口らが述べているように¹¹⁶⁾、精華学校の転地修養会は、世に先駆けて本格的に実施された林間学校であったことも十分確認で

きた。

また、欧米では結核などの疾病を抱えている子供達、あるいは虚弱体質の子供達だけを対象として実施されていたのに対し、そのような状態には無い、いわゆる普通の子供達に実践したことは特筆されるべきことである。さらに、夏季に実施することが一般的であった状況において、冬季に海岸近くという環境下で実施したことも特色の一つとせねばなるまい。

同校が行った転地修養会は毎回、新聞社や雑誌社の記者、教育関係者や避暑に来ていた人々などの訪問を数多く受けた。転地修養会の様子は、取材をした記者によって「東京朝日新聞」や「教育時論」・「体育」・「教育界」・「児童研究」などで頻繁にしかも詳細に報道された。寺田自身も、政治家・行政官・教育関係者などの来賓を招いて毎年行っていた精華学校記念式典において、あるいは著書や雑誌を通じて同会の報告を行っている。同校の学校医であった小原は、第1回と第2回の実施における参加児童の変化(効果)について小児学会で発表をし、同学会の機関誌「児科雑誌」に論文を投稿した。

こうした状況と、寺田や同校学監・湯本の教育界における認知度や影響力、医学界における小原の認知度などから総合的に判断すると、同校の転地修養会は野口が指摘しているように¹¹⁷⁾、教育界や医学会を中心として社会的な注目を集め、世に林間学校の存在や教育的効果を知らしめたものであったとしなければならぬ。また、渡辺の見解のとおり¹¹⁸⁾明治期末から大正期の初期に林間学校の実施を試みる団体に対して影響力を持ったものであったといえよう。そして、開催を見合わせ続けた1910(明治43)年以降も、寺田は女子体育教員を養成する日本体育会体操学校女子部の学生や、教育関係者に対して転地修養会の啓蒙を行い続けている。精華学校の開校当時の兼任教員であった伊藤長七は、1919(大正8)年から東京府立第五中学校の校長となり、同年から「転地修養隊」を実施している。実施形態や内容から、転地修養会をモデルに企画されたことが窺い知れ

る¹¹⁹⁾。大正期に実施された日本の林間学校の内、学業の習得を目的にしたもの以外は、実施内容や組織などにおいて転地修養会のそれと大きく変わるものではなかった¹²⁰⁾。

以上のようなことから、精華学校の転地修養会は、大正期の日本で急速に普及する林間学校のまさに礎的な存在としての評価が見いだされるところである。同時に、同校へ転地修養会を導入した寺田勇吉に対しても、近代化に向かって発展する教育界に一つの功績を残したものとして光を当てる必要がある。その際、転地修養会の実施のきっかけを作り、しかも医学的な価値を実証した小原頼之の存在を忘れてはならないだろう。

5. おわりに

寺田勇吉は、我が国がドイツをモデルとしながら近代国家を建設し始めた明治期において、19年間におよぶ教育行政官としての立場から、教育政策や教育制度の基盤整備に尽力するかたちで、我が国の近代教育の定型化に寄与する活躍を果たした。同時に、ドイツ語が堪能であった寺田は、海外での視察以降にドイツを中心とした欧米の教育状況に精通していった。この期間に得た知識から、彼なりの近代教育理念が形成され、その具現化を求めて明治期中盤以降は、学校を統括する立場から教育現場での活動を19年間に亘って展開した。

その理念が集約された学校こそが、近代日本の教育界を牽引していく人物達からも支援を受けて、彼が自ら設立して校長職を務めた精華学校であった。近未来の日本を先導する役割を果たす可能性が高い子供達、つまり初等から高等教育までの教育を受け得る子供達を対象に、一貫教育を施すことを実現した学校である。当時の国民の経済状況や教育に対する価値観などの事情から、結果的に中流以上の家庭の子供達を対象とした学校を設立した。また、学校経営の事情から、中等および高等教育までの一貫教育は女子に対してのみ実現させた。寺田が女子教育を優先した理由は、日本において近代的女性像の確立とその実現こそが

急務であると考えたからである。

精華学校は、ヘルバルト教育学を実践しながら教育効果を高めることを目指す一方で、身体が不健全な状態であることは人生の最大の不幸であり、身体が丈夫でなければ習得したいかなる学問も用をなさないとの理念から、知育偏重傾向が強かった時代にもかかわらず、体育重視という方針の下で教育が展開された。そこでは、課外体育(健康)活動も積極的に導入された。その中の一つに「転地修養会」という、明治期の日本ではあまり知られていなかったと推察されるプログラムが実践されていた。これは、ドイツを始め欧米諸国で、明治20年代から夏期休暇を利用して盛んに実施されていた林間学校である。

寺田は欧米諸国での実施状況や内容を細かく調査し、その結果、ドイツのシュトゥットガルト協会のフェリエンコロニー(休暇集落臨時施設型林間学校)をモデルに実践することを決め、「転地修養会」と命名した。組織や内容もそれに近づけ、欧米で行われていたものと同様の、いわば本格的な林間学校を実践した。寺田を実施へと動かしたのは、このプログラムが精華学校の教育方針に合致し、特に体質・体格などの肉体的な面と精神面での改善や成長を期待できることが判明したからであった。

精華学校の「転地修養会」は、1907(明治40)年から3年間連続して合計3回実施された。宿泊をしながら展開する、いわゆる「全聚落」型林間学校であった。活動の内容は、毎回とも毎日の日課プログラムと数種のイベント的なプログラムが行われていたが、実施回数を重ねるたびにそれは多様なものとなり、最終的には9つの日課プログラムと3つのイベントのプログラムが展開されている。また、衛生面や健康面に対する配慮も回を追うごとに充実をしていった。それは会場選びや、同行したスタッフの指導・管理組織などからも確認できた。体質や体格の改善が目的の一つであったため、毎日の3食の食事や補食にも十分な注意が払われていた。こうした取り組みから、同校の「転地修養会」は参加児童の体格の改善、自治的

精神の向上, 食生活を始めとする生活習慣の改善などにおいて効果を残すことができた。

結果を残しながら展開された「転地修養会」ではあったが, 実施のための費用や場所などの問題から, 1909 (明治42) 年を最後に, それ以後は計画が立てられながらも開催されてはいない。それでも, 同校の「転地修養会」は, 日本で最初に行われた欧米並みの本格的な林間学校であると評価できた。さらには, 社会的な注目を集め, 明治期後期から大正期にかけての林間学校の実施に対して影響力を持ったことで, 結果として大正期に入って日本で急速に普及する林間学校の礎的な位置づけと評価を見いだすことができた。「転地修養会」を主宰した寺田勇吉の, 近代日本における課外教育の発展に対する功績も偉大であったといわざるを得ない。

注

(注1) 精華学校の転地修養会が最も早い実施であることを明言した研究は, 以下のようなものがある。

- ① 山田誠 (1973) 明治・大正期における林間学校について. 東京教育大学大学院修士論文.
- ② 岸野雄三・竹之下休蔵 (1983) 近代日本学校体育史. 日本図書センター: 東京. 95.
- ③ 恩田裕 (1995) 休暇集落の成立過程. 教養論集 (12): 63-104.
- ④ 杉浦守邦 (1997) フェリエンコロニー 茂木俊彦ほか編 障害児教育大事典. 旬報社: 東京. 707-708.
- ⑤ 佐野裕 (1999) 偉大な教師としての自然について. 横浜国立大学教育人間科学部紀要 教育科学 (2): 1-12.
- ⑥ 渡辺貴裕 (2005) <林間学校>の誕生 一衛生的意義から教育的意義へ一. 京都大学大学院教育学研究科紀要 51: 343-356.
- ⑦ 井村仁 (2006) わが国における野外教育の源流を探る. 野外教育研究 10 (1): 85-97.
- ⑧ 野口穂高 (2016) 大正期における「林間学校」の受容とその発展に関する一考察 一その目的と実践内容の分析を中心に一. 早稲田大学教育・総合科学学術院学術研究 64: 387-407.

(注2) 寺田の略歴や活動を取り上げた主要な文献は,

以下のとおりである。

- ① 真行寺朗生 (1928) 近代日本体育史. 日本体育学会: 東京.
 - ② 財団法人開国百年記念文化事業会編 (1955) 明治文化史第三巻教育・道徳編. 洋々社.
 - ③ 海後宗臣編 (1968) 井上毅の教育政策. 財団法人東京大学出版会: 東京.
 - ④ 内田紘 (1968) 明治期学制改革の研究. 中央公論事業出版: 東京.
 - ⑤ 石橋武彦他 (1968) 増補日本の体操. 不味堂: 東京.
 - ⑥ 東京体育科学研究会編 (1970) 新体育学講座第54巻 体育人名辞典. 逍遥書院: 東京.
 - ⑦ 国立教育研究所編 (1973) 日本近代教育百年史第一巻教育政策 I. 国立教育研究所: 東京.
 - ⑧ 学校法人日本体育会日本体育大学八十年史編纂委員会 (1973) 学校法人日本体育会日本体育大学八十年史. 不味堂: 東京.
 - ⑨ 木村吉次 (1975) 日本近代体育思想の形成. 杏林書院: 東京.
 - ⑩ 文部省実業事務局編纂 (1981) 実業教育五十年史・続篇. 日本図書センター: 東京.
 - ⑪ 岸野雄三・竹之下休蔵 (1983) 前掲書.
- (注3) 本研究では, 以下の寺田の著書を基本史料の一つとして使用した。
- ① 寺田勇吉 (1898) 学校改良論. 南江堂: 東京.
 - ② 寺田勇吉 (1912) 寺田式国民健康法. 開発社: 東京.
 - ③ 寺田勇吉 (1919) 寺田勇吉経歴談. 精華学校: 東京.
 - ④ 寺田勇吉 (1921) 学校より家庭へ. 精華学校: 東京.
- (注4) 共立統計学校は, 日本近代統計の祖と称されている杉亨二 (1826 ~ 1917) が1883 (明治16) 年に設立した学校であるが, 3年で廃校になっている。(下中邦彦編 1979 日本人名大事典 (新撰大人名辞典). 覆刻版. 平凡社: 東京. 453.)
- (注5) 視察団は, 久保田讓・寺田勇吉・文部省会計局検査課勤務兼高等商業学校教諭でのちに台湾商工銀行頭取となる木村匡 (波形昭一 2017 植民地期台湾の銀行家・木村匡. ゆまに書房: 東京. 32-110.)・文部省会計局用度課長河村重固 (内閣官報局 職員録 甲. 1888. 259.) の4名であった。訪問した国は, フランス・ドイツ・ノルウェー・スウェーデン・オーストラリア・ハンガリー・イタリア・スイス・ベルギー・オランダ・イギリス・アメリカの12か国であり, そのうちドイツに最も長く滞在している。視察先は文部省・各種学校・図書館・県庁・市庁・警察署などであった。(寺田勇吉 1919 前掲書: 78-114.)
- (注6) 寺田が起草し, 井上らが修正を加え最終案となった法令には「小学校教育補助法案」・「実業補習

- 学校規程」・「尋常中学校ノ学科及其程度」・「実業教育費国庫補助法」・「工業教員養成規程」・「文部省令第12号」・「実業教育費国庫補助法施行規則」・「尋常中学校実科規程」・「高等学校令」・「簡易農学校規程」・「徒弟学校規程」などがある。(青木清隆 1989 見形道夫先生退官記念論集 体操とスポーツと教育と。大空社：東京。144-145.)
- (注7) 寺田が大臣官房会計課長を務めたのは、1897(明治30)～1901(明治34)年の4年間である。この時期の日本は、日清戦争終結から日露戦争に向かう時期で、軍国主義・国家主義の下で国家予算の多くが軍事費や国防費にあてられていた。そのため、寺田は教育予算の獲得には大変な苦勞をしたようである。(寺田勇吉 1919 前掲書：122-124.)
- (注8) 独逸学協会学校は、ドイツ文化の日本への移植を目的に1881(明治14)年結成された独逸学協会(井上毅・桂太郎・青木周蔵なども名を連ねている)によって、1883(明治16)年に設立された旧制私立学校。独協中学校・高等学校・大学の前身でもある。(独協学園百年史編纂委員会編 1979 独協百年 第一号。独協学園百年史編纂室：東京。20-371.)
- (注9) 東京外国語学校は、1885(明治18)年に英・仏・独学科が東京大学予備門(現東京大学)に、清・朝・魯学科が東京商業学校(現一橋大学)に吸収併せられた。(国史大辞典編纂委員会編 1989 国史大辞典 第10巻。吉川弘文館：東京。49.)
- (注10) 第一高等中学校の前身である。(国史大辞典編纂委員会編 1989 国史大辞典 第10巻。吉川弘文館：東京。62.)
- (注11) 現在の東京大学の前身である。(国史大辞典編纂委員会編 1989 前掲書：62.)
- (注12) 現在の筑波大学の前身である。(秋庭隆編 1995 日本大百科全書 16。小学館：東京。638-639.)
- (注13) 現在の一橋大学の前身である。(国史大辞典編纂委員会編 2006 国史大辞典 第11巻。吉川弘文館：東京。950-951.)
- (注14) 現在の日本橋女学館高等学校(開智・日本橋教育グループ)の前身である。(日外アソシエーツ株式会社編 2006 学校名変遷総覧。日外アソシエーツ株式会社：東京。150。http://www.sgate2.com/ebook/user/njk2/books/images/2/3.jpg)
- (注15) 現在の日本体育大学の経営母体、学校法人日本体育会の前身である。(学校法人日本体育会日本体育大学八十年史編纂委員会 1973 前掲書：865.)
- (注16) 日本体育大学の前身であり(学校法人日本体育会日本体育大学八十年史編纂委員会 1973 前掲書：23.)、学監の職務は、「校規を維持し、校務を監督し、教育全般に関し意見を陳述す校長不在の時は校務を代理す」というものであった。(日本体育会学校職制及事務章程。1904 体育 131：7.)
- (注17) 寺田勇吉が設立した幼稚園・小学校・高等女学校の女子一貫校である。
- (注18) 日本体育会体操学校に女子部が開設されたのは1903(明治36)年であり、寺田は初代女子部部长に就任し、15年ほどその任にあたった。(学校法人日本体育会日本体育大学八十年史編纂委員会 1973 前掲書：394-560.)
- (注19) 1904(明治37)年から1911(明治44)年まで日本体育会会長と体操学校校長を兼務し、日本体育会の名声を不滅のものとしたと評された加納久吉が辞任した後の後任の校長が決まらず、寺田が4年ほど校長代理を務めた。(学校法人日本体育会日本体育大学八十年史編纂委員会 1973 前掲書：221-481.)
- (注20) 明治政府が1878(明治11)年に設立した日本最初の体育の研究・教育機関(国立)である。1885(明治18)年に東京師範学校の付属校となり、翌年には東京高等師範学校の体育専修科に改編された。
- (注21) 寺田が体操伝習所の再興を目指した理由は次のとおりである。
「元來日本人は歐米人と人種を異にし、生活方も異にするものなれば、体操も自ら異にせざるべからず、是れ余が体操傳習所を再興して、伯林の中央体操傳習所或は瑞典ストックホルムに於る体操学校に倣へ、十分に体操を研究せしめ、我邦の体操を一定すると共に、善良なる体操教員を養成する機關たらしめんことを企圖したる所以なり」(寺田勇吉 1919 前掲書：127.)
- (注22) 国庫補助の支給は、日本体育会にとって財政の安定化と事業拡大を可能にただけではなく、同会が「政府に代って体操教員の養成と社会体育の振興にあたる公的使命をになう民間団体へと発展」(学校法人日本体育会日本体育大学八十年史編纂委員会編 前掲書：34.)したのである。この措置は単に同会の発展のみならず、近代日本における体育界の発展上極めて有益なものであったといえる。
- (注23) 寺田の講演は、「教育時論」・「中央公論」・「体育」などにも掲載され、傍聴者や関係者の間で高い評価を得ていたことが窺い知れる。
- (注24) 寺田には、勇一、長子、高子、吉子の1男3女の子供がいた。勇一は東京高等師範学校附属小学校・中学校を、3人の娘は全員東京高等師範学校附属小学校・高等女学校を卒業している。(寺田勇吉 1919 前掲書：134.)
- (注25) 寺田がこの時期執筆や翻訳をした著作書は、以

下のとおりである。

[著書]

- ①『育児論』(1892. 問室親遠:東京.)
- ②『教育叢書第一編 教育制度』(1896. 普及舎:東京.)
- ③『学校改良論』(1898. 南江堂:東京.)
- ④『商業軌範』(1902. 普及舎:東京.)
- ⑤『商工国読本甲編』(1903. 普及舎:東京.)

[訳書]

- ①『財政原論』(平塚定二郎共訳. 1891. 八尾書店:東京.)

[編書]

- ①『独英和三対小字彙』(保志虎吉共編著. 1893. 共同館:東京.)

寺田はこれ以外にも、「女学世界」・「教育界」・「なでしこ」を始め、雑誌での執筆や翻訳を行っている。

(注26) 寺田が賃貸収入を得ていたのは、①牛込区納戸町11番地(58坪)、②小石川区老松町39番地(650坪)、小石川区高田豊川町24番地(1513坪)などからである。(寺田勇吉 1919 前掲書:39-41.)

(注27) 湯本武比古(1856-1925)は東京高等師範学校を卒業し、その後皇族の教育を専門とし、東宮明宮(大正天皇)の教育係を務めた。学習院や高等師範学校で教員としての経験も持つ。寺田が欧米視察をした同じ時期に約4年間(1889-1893年)ドイツ留学をしている。1903(明治36)年当時は、「教育時論」などを編集・出版していた開発者の社長であった。1908(明治41)年からは京北実業学校の校長を兼務する。(三省堂編集所 2009 コンサイス日本人名事典、第5版、三省堂:東京、1409.)

(注28) 深井弘は、長野県師範学校を卒業し(長野県師範学校同窓会 1913 学友、56:27.)、高知県尋常師範学校・三重県尋常師範学校・奈良県尋常中学校・長野県師範学校の校長を務めた人物である(内閣官報局官報3194号/1894.4090号/1897.4206号/1897.5625号/1902.)。彼は1905年の精華学校開校の直前に、韓国(木浦)で事業を起こすために寺田のもとを去っている。(寺田勇吉 1919 前掲書:139.)

(注29) 校舎建築費用と設備費用を合わせて4,000円以上かかっている。寺田が長年貯蓄してきた準備金や湯本・深井の私財だけでは足りなかったため、不足分は寄付によって賄った。日露戦争勃発という社会情勢のため寄付集めは難航したが、井上毅・伊藤博文・岩崎久彌(三菱財閥3代目)・森村市右衛門(森村財閥創設者)・三井家から6,000円を集めた。(寺田勇吉 1919 前掲書:137-139.)

(注30) 遊佐誠甫が著した書物には、『小學修身教授書』(1885)、『初学漢文教授法:完』(1898)集英堂、『高

等小學算術教授週案』(1902)教授法研究会、『國定讀本毎時教授細案及教授法:尋常科の部』(1904)金昌堂などがある。(国立国会図書館 Web NDL Authorities. <https://id.ndl.go.jp/auth/ndlna/00510133>.)

(注31) 明治期に麹町区(現千代田区)で設立された私立幼稚園の月額保育料は1円未満というところが多い中、精華幼稚園の保育料は中でも高かった(千代田区教育委員会 1980 千代田区教育百年史一上巻、千代田区:東京、510-523.)。精華学校は幼稚園だけではなく、小学校や九段精華高等女学校も学費は高く、それは当時の雑誌の記事でも確認できる。

(注32) 精華学校では英語の授業にも力が注がれ、戦時中でも英語の授業が行われていたようである。担当教員には外国人教員が採用されることも多く、例えば1916(大正5)年からは、仏教学者鈴木大拙の妻で東洋仏教学者でもあったアメリカ人女性ビアトリス(Beatrice Suzuki)が授業を担当している。(江刺昭子+史の会編 2005 時代を拓いた女たち かながわの131人、神奈川新聞社:神奈川、146.)

(注33) 葛原しげる(1886-1961)は東京高等師範学校英語部卒業後、1909(明治42)年から精華学校の小学校で訓導を務め、その後高等女学校でも教鞭をとった。日本女子音楽学校・中央音楽学校・跡見高等女学校などでも教員歴を持ち、戦後は至誠女子高等学校の校長を務めた。その間に3,000余りの新作童謡や童話を発表した。(日外アソシエーツ株式会社編 2004 20世紀日本人名事典 あ〜せ、日外アソシエーツ株式会社:東京、908.)

(注34) 尺秀三郎(1862-1934)は、東京高等師範学校を卒業した後、1888(明治21)年にドイツ留学をして教育学を学んでいる。帰国後は東京美術学校や東京外国語学校で教授を務めた人物である。(下中邦彦編 1979 日本人名大事典(新撰大人名辞典)、覆刻版、平凡社:東京、531.)

(注35) 丸山環(1873-1952)は、東京帝国大学文化大学独文科を卒業し、第六・第八高等学校の教授を経て、第六高等学校や甲南高等学校の校長を歴任した人物である。(東京帝國秘密探偵社 1942 大衆人事録、第14版、帝國秘密探偵社:東京、940.)

(注36) 精華学校には、個別訓練・学級訓練・集合訓練・臨時訓練からなる11条の「訓練」規定が設けられており、個別訓練は毎日放課後に実施されていた。(精華学校の一部 1909 教育時論 871:20.)

(注37) 精華学校の記念式典は1909(明治42)年に創立5周年を開催して以後、ほぼ毎年創立記念日とされた6月6日に行われた。来賓には、政治家・官僚・

- 会社社長・教育者などが参列する場合が多かった。
- (注38) 雑誌「体育」などで、九段の精華・晩秋の錦・後月サークル・源平力競べ・九段の錦・蹴鞠競争などの集団体操や遊戯種目が紹介されている。
- (注39) 例えば教育時論において、「精華学校の生徒は、大抵富貴の家に成長せる者なれども、斯る社会の通弊たる柔儒の氣風は寸毫も認めざるのみならず、孰れも有爲の氣象躍如として、世の貴公子の規箴と爲すに足るものあり」との評価を受けている。(寺田勇吉 1919 前掲書：146.)
- (注40) 服部教一(1872-1956)は文部省や内務省の官僚を経て、衆議院議員や参議院議員を務めた人物である。(日外アソシエーツ株式会社編 2003 新訂政治家人名事典 明治～昭和. 日外アソシエーツ株式会社：東京. 491.)
- (注41) 林間学校の実施数を全国で増やすことを目的とした本建議案は、1921(大正10)年3月の第44回帝国議会(衆議院)で可決された。(野口穂高 2016 前掲書：394.)
- (注42) 岸野雄三はこのことに対して、明治期に西欧の林間学校の紹介がされて、教育界に多少の関心を呼び起こした程度のものでしている。(岸野雄三・竹之下休蔵 1983 前掲書：95.)
- (注43) 1918(大正7)年、文部省普通学務局が「夏季休暇中ノ体育的施設ニ関スル意見」をまとめ、「林間聚落」・「山間聚落」・「海浜聚落」などの実施方法について示している。(野口穂高 2016 前掲書：393.)
- (注44) 文部大臣官房学校衛生課が、「大正七、八、九、三箇年に於ける全国夏季体育的施設」の調査(1918～1920年)や、「夏季に於ける体育的施設の状況調査」(1918～1923年)を行った。(野口穂高 2016 前掲書：393.)
- (注45) 小原頼之(1860-1908)は、京都府療病院正則医学校を卒業し、第一高等中学校助教授を経て小児科病院を開業。小児科学会常議委員や、「児科雑誌」編集委員なども務めた。(小原芳樹編 1940 萩の上風. 古今書院：東京. 15-33.)
- (注46) 発案者の一人である小原は、フェリエンコロニーに対しては「転地休養」という訳語を使用している。(小原頼之 1908 育児日記 親ごころ. 文陽堂書店：東京. 282-297.)
- (注47) 寺田が何故同協会の実施組織や実施内容を参考としたか、その理由や同協会そのものの詳細については現段階では不明である。
- (注48) 1916(大正5)年には、日本近代詩の父と称されている萩原朔太郎(1886-1942)が保養を兼ねて3か月ほど滞在し、『月に吠える』の編集作業を行っている(下中邦彦編(1979) 日本人名大事典 現代. 第1版. 平凡社：東京. 405. / 萩原朔太郎 1986 萩原朔太郎全集. 補訂版. 筑摩書房：東京. 389-393.)。なお、鎌倉「海月楼」は現存していない。
- (注49) 中之嶽登山は、往復約8キロ程度であったと考えられる。
- (注50) 第2回転地修養会でも小原の研究は実施され、その効果は前掲児科雑誌に掲載されている。また寺田自身も「今回は既に相當の経験あるを以て、管理訓練共に一層整頓し、頗る優等の成績を挙げたり」(寺田勇吉 1919 前掲書：153.)としている。
- (注51) 第1回と第2回に同行した学校医の小原が、1908(明治41)年12月に腸チフスによって他界したことで、このような体制になったと考えられる。
- (注52) 佐佐木信綱(1872-1963)は、歌人・国文学者・文学博士である。多くの著書を残す一方で、小学校から高等学校の校歌もたくさん作詞している。(下中邦彦編 1979 日本人名大事典 現代. 第1版. 平凡社：東京. 357.)
- (注53) 転修養会の歌は、「一、黄金白銀ちりばめて、たてし宮居の美しさ、日光見ずは結構と、云ふなり云へり昔より 二、年経し杉の蔭ふみて、大谷の流ながめつゝ、心にしのお古への、すぐれし人の面影を 三、規律正しき生活に、心をきたへ身をきたへ、あつさを知らぬ日光に、我等は夏を過ぎまし」(寺田勇吉 1919 前掲書：154.)というものであった。
- (注54) 実施期間中は山間部でありながら、雨や雷が少なかったようである。(精華修養会の壮舉 1909 教育時論 877：38.)
- (注55) 現代の価値に試算することは難しいが、例えば明治40年と平成10年の場合を企業物価指数で計算すると、150円×1.088(倍)=163.200円となることから、これが高額であったことを理解することができる。(金融資料館「スペース82」http://www.ncp.or.jp/dir6/d6_5_2_4.html)
- (注56) 明治40年の高等文官試験に合格した高等官(公務員)の初任給が50円、明治45年の慶應義塾大学文科系の1年間の授業料が48円であったことを考えると、児童の参加費が高かったことがわかる。(週刊朝日編 1988 値段史年表 明治・大正・昭和：朝日新聞社.)
- (注57) 「教育時論」や「体育」などの記事で、転地修養会を計画していたことが窺える。例えば、1912(明治45)年の「教育時論」の記事には、7月25日頃から8月半ばの3週間の予定で茨城県の助川か千葉県の大原の海辺で実施しようとしていることが掲載さ

れている。(精華學校祝賀式 1912 教育時論 978 : 23.)

引用・参考文献

- 1) 野口穂高 (2016) 大正期における「林間学校」の受容とその発展に関する一考察 —その目的と実践内容の分析を中心に—. 早稲田大学教育・総合科学学術院学術研究 64 : 389-391.
- 2) 木村吉次 (1987) 学校体育・スポーツ行事. 岸野雄三編 最新スポーツ大事典. 大修館書店 : 東京. 177.
- 3) 青木清隆 (1989) 見形道夫先生退官記念論集 体操とスポーツと教育と. 所収. 大空社 : 東京. 143-163.
- 4) 寺田勇吉 (1919) 寺田勇吉経歴談. 精華学校 : 東京. 12.
- 5) 同上書. 13.
- 6) 同上書. 75.
- 7) 海後宗臣編 (1968) 井上毅の教育政策. 財団法人東京大学出版会 : 東京. 1.
- 8) 寺田勇吉 (1919) 前掲書 : 212-215.
- 9) 同上書. 216-217.
- 10) 同上書. 129.
- 11) 同上書. 133.
- 12) 同上書. 150.
- 13) 学校法人日本体育会日本体育大学八十年史編纂委員会編 (1973) 学校法人日本体育会日本体育大学八十年史. 不味堂 : 東京. 23-24.
- 14) 岸野雄三・竹之下休蔵 (1983) 近代日本学校体育史. 日本図書センター : 東京. 42-43.
- 15) 同上書. 60.
- 16) 寺田勇吉 (1919) 前掲書 : 134-135.
- 17) 寺田勇吉 (1909) 精華學校創立第 5 周年記念式辭. 体育 188 : 32.
- 18) 寺田勇吉 (1919) 前掲書 : 136.
- 19) 同上書. 134-135.
- 20) 同上書. 135.
- 21) 同上書. 137-138.
- 22) 同上書. 139.
- 23) 下中邦彦編 (1979) 日本人名大事典 (新撰大人名辭典). 覆刻版. 平凡社 : 東京. 315.
- 24) 下中邦彦編 (1979) 日本人名大事典 現代. 第 1 版. 平凡社 : 東京. 405.
- 25) 横山生 (1909) 四とせの昔. 体育 183 : 46.
- 26) 寺田勇吉 (1919) 前掲書 : 162.
- 27) 同上書. 163.
- 28) 寺田勇吉 (1909) 前掲書 : 33.
- 29) 寺田勇吉 (1919) 前掲書 : 144.
- 30) 同上書. 140.
- 31) 学校法人日本体育会日本体育大学八十年史編纂委員会編 前掲書 : 526-528.
- 32) 寺田勇吉 (1919) 前掲書 : 161.
- 33) 精華學校記念式 (1909) 教育時論 870 : 38.
- 34) 寺田勇吉 (1919) 前掲書 : 161.
- 35) 精華高等女學校創立 (1910) 教育時論 918 : 37-38.
- 36) 精華學校の近況 (1914) 教育時論 1041 : 39.
- 37) 千代田区女性史編纂委員会編 (2003) 千代田区女性史 第 2 卷. ドメス出版 : 東京. 104-136.
- 38) 日本工業倶楽部編 (2003) 日本の実業家 —近代日本を創った経済人伝記目録. 第 1 版. 日外アソシエーツ株式会社 : 東京. 91.
- 39) 芳賀登他監修 (1998) 日本女性人名辞典 [普及版]. 日本図書センター : 東京. 542.
- 40) 写真集櫛田ふき百歳の軌跡編集委員会 (1999) いのちを愛し 平和を求めて. ドメス出版 : 東京. 72-73.
- 41) 消えた「姉妹でコーチ」の夢. 東京新聞朝刊 2015 年 10 月 25 日 朝刊. 1.
- 42) 寺田勇吉 (1919) 前掲書 : 142.
- 43) 同上書. 143.
- 44) 精華學校の近況 (1914) 前掲書 : 38.
- 45) 寺田勇吉 (1919) 前掲書 : 148.
- 46) 細谷俊夫他 (1990) 新教育学大事典 第 6 卷. 第一法規出版株式会社 : 東京. 210-212.
- 47) 山本正身 (1985) 日本におけるヘルベルト派教育学の導入と展開. 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 25 : 69-70.
- 48) 寺田勇吉 (1909) 前掲書 : 33-34.
- 49) 木下秀明 (1978) スポーツの近代日本史. 第 3 版. 杏林書院 : 東京. 78-82.
- 50) 精華學校運動會 (1914) 教育時論 1065 : 27.
- 51) 木下秀明 (1960) 明治時代の運動會. 新体育 30 (9) : 24-25.
- 52) 野口穂高 (2016) 前掲書 : 388-391.
- 53) 小田俊三 (1922) 野外学校の学理と實際. 弘道館 : 東京. 13-18.
- 54) 関寛之 (1919) 輓近の児童研究. 洛陽堂 : 東京. 307-308.
- 55) 鶴飼盈治 (1923) 日本アルプスと林間学校. 同文館 : 東京. 43.
- 56) 関寛之 (1919) 前掲書 : 307-308.
- 57) 野口穂高 (2016) 前掲書 : 390-391.
- 58) 鶴飼盈治 (1923) 前掲書 : 56.
- 59) 同上書. 60.
- 60) 杉浦守邦 (1997) フェリエンコロニー 茂木俊彦ほか編 障害児教育大事典. 旬報社 : 東京. : 707-708 ;

- 野口穂高 (2016) 前掲書：389；渡辺貴裕 (2005) 〈林間学校〉の誕生—衛生的意義から教育的意義へ—。京都大学大学院教育学研究科紀要 51：349-350.
- 61) 野口穂高 (2016) 前掲書：393.
- 62) 寺田勇吉 (1909) 轉地修養會. 教育時論 875：3.
- 63) 同上書. 2-4.
- 64) 精華學校轉地修養會 (1908) 教育時論 824：7.
- 65) 寺田勇吉 (1909) 前掲書：3.
- 66) 同上書. 同頁.
- 67) 同上書. 4.
- 68) 同上書. 5.
- 69) 寺田勇吉 (1919) 前掲書：152.
- 70) 同上書. 同頁.
- 71) 同上書. 同頁.
- 72) 同上書. 同頁.
- 73) 精華學校轉地修養會 (1908) 前掲書：7.
- 74) 同上書. 同頁.
- 75) 寺田勇吉 (1919) 前掲書：152.
- 76) 精華學校轉地修養會 (1908) 前掲書：7.
- 77) 小原頼之 (1908) 精華學校に於けるフェリエンコロニーの成績. 児科雑誌：406-409.
- 78) 精華學校轉地修養の效果 (1908) 教育時論 820：36.
- 79) 寺田勇吉 (1909) 前掲書：4.
- 80) 精華學校轉地修養會 (1908) 前掲書：7.
- 81) 小原頼之 (1908) 育児日記 親ごころ. 前掲書：484.
- 82) 寺田勇吉 (1919) 前掲書：153.
- 83) 同上書. 同頁.
- 84) 同上書. 同頁.
- 85) 同上書. 同頁.
- 86) 精華學校第2回轉地修養會 (1908) 教育時論 841：37.
- 87) 妙義山の修養會 (1908) 教育時論 840：40.
- 88) 同上書. 同頁.
- 89) 精華學校第2回轉地修養會 (1908) 前掲書：37.
- 90) 同上書. 同頁.
- 91) 妙義山の修養會 (1908) 前掲書：40.
- 92) 寺田勇吉 (1919) 前掲書：153.
- 93) 同上書. 154.
- 94) 同上書. 同頁.
- 95) 寺田勇吉 (1919) 前掲書：154.
- 96) 精華學校轉地修養會 (1909) 体育 190：37.
- 97) 同上書. 同頁.
- 98) 同上書. 同頁.
- 99) 精華學校轉地修養會 (1909) 前掲書：37-38.
- 100) 寺田勇吉 (1919) 前掲書：154.
- 101) 精華學校轉地修養會 (1909) 前掲書：38.
- 102) 寺田勇吉 (1919) 前掲書：154.
- 103) 精華學校轉地修養會 (1909) 前掲書：38.
- 104) 精華修養會の壯舉 (1909) 教育時論 877：38.
- 105) 同上書. 同頁.
- 106) 同上書. 同頁.
- 107) 同上書. 同頁.
- 108) 同上書. 38-39.
- 109) 精華學校轉地修養會 (1909) 前掲書：39-40.
- 110) 寺田勇吉 (1919) 前掲書：155.
- 111) 寺田勇吉 (1910) フェリエンコロニー (轉地修養會). 教育時論 908：27.
- 112) 同上書. 同頁.
- 113) 寺田勇吉 (1919) 轉地修養會. 教育界 8 (12)：14.
- 114) 寺田勇吉 (1909) 轉地修養會 前掲書：5.
- 115) 岸野雄三・竹之下休藏 (1983) 前掲書：95.
- 116) 杉浦守邦 (1997) 前掲書：708；渡辺貴裕 (2005) 前掲書：350；野口穂高 (2016) 前掲書：393.
- 117) 野口穂高 同上書. 同頁.
- 118) 渡辺貴裕 (2005) 前掲書：350.
- 119) 矢崎秀彦 (2002) 寒水伊藤長七伝. 鳥影社：東京. 218-227.
- 120) 野口穂高 (2016) 前掲書：393-404；渡辺貴裕 (2005) 前掲書：344-353；山田誠 (1976) 初期の夏期林間学校の性格について. 神戸大論叢 27 (4)：105-124.

